

文部科学省委託 令和7年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業

他分野連携による新たな障害者の生涯学習のモデル・ネットワーク構築

「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に関する実践研究 報告書

重度障害者・生涯学習ネットワーク

令和8年3月1日

文部科学省委託

令和7年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業

他分野連携による新たな障害者の生涯学習のモデル・ネットワーク構築

「重度医療的ケア者対象の 訪問型生涯学習支援」に関する実践研究 報告書



重度障害者・生涯学習ネットワーク

令和8年3月1日

文部科学省委託

令和7年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
他分野連携による新たな障害者の生涯学習のモデル・ネットワーク構築

「重度医療的ケア者対象の 訪問型生涯学習支援」に関する実践研究 報告書

重度障害者・生涯学習ネットワーク

目次

項目		頁
はじめに		1
Ⅰ 研究計画		2
	1. 目的	2
	2. 方法	2
	3. 研究の全体像	3
Ⅱ 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム		4
	1. 「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」のプログラム開発	4
	2. 研究方法	4
	3. 結果	5
	4. 考察	15
Ⅲ 運営・地域連携		16
	1. 研究テーマ	16
	2. 研究方法と記録	17
Ⅳ 人材育成		25
	1. コーディネーターの活動やボランティアの育成・活用等の内容	25
	2. オープンハートキャンパス実施報告	27
Ⅴ 理解啓発		30
	1. これまでの取組の成果	30
	2. 実施方法と内容	30
	3. 実施記録	31
Ⅵ 研究のまとめ		61
おわりに		63

はじめに

「学んで生きる」を励ます、輝く学生証

重度障害者・生涯学習ネットワーク

会長 飯野 順子

(NPO 法人地域ケアさぼーと研究所理事長)

ある大学院での特別講義で私は、「訪問カレッジの学生証は玄関などに、額に入れて飾ってあります」と言いながら、この写真を見てもらいました。講義後の大学院生のレポートには、次のように感想がありました。

ワコさんは、私と同じ女子大生だったんですね。自宅に開かれた教室で、ワコさんはどんな音楽を奏でていたのでしょうか。「学ぶことは生きることと 学ぶことは生きる喜び」という趣旨を掲げる生涯学習ネットワーク。ベッドの上の学生と学習支援員の皆さんの存在に、今日は、私が生きることを励ましてもらいました。

(中略)

今、靴から、自分の学生証を出してみました。先生の講義のお陰でどこかキラキラして見えます。大学院に進学し、四半世紀ぶりに学んで生き道を選んだ私は、なりゆき任せの客体から、自らの歴史を創る主体に変える「学習宣言(ユネスコ)」を実現したのですね。

この権利を大切に、あと少し頑張って「卒業」という履歴を創ってみます。皆さんも、どうかこの冬を乗り越えて、あたたかな春の歌を奏でて下さい。いつかえにしが結ばれたら幸せだなと思っています。

学生証は、カレッジ活動のシンボルです。この講義の時、カレッジ生の学びは、一人の心に深く響いただけではなく、多くの方に感銘・共感・共鳴していただきました。

私たちの活動も、現状では、まだまだ知られていないのですが、この2年間で、学びの幅が広がり、質的にも高まっています。周知の方法としての分かりやすいパンフレットの作成等も実現しています。

本誌をとおして、「訪問型の生涯学習」が進み、その輪が大きくなることを期待しています。今年度も多くの方のご協力をいただきました。感謝申し上げます。



I 研究計画

1. 目的

近年、医療技術の進歩を背景に、たんの吸引や経管栄養等の医療的ケアが日常的に必要な「医療的ケア児」が増加し、令和3年9月に「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」（略称、医療的ケア児支援法）が施行され、学校において保護者の付添いがなくても適切な医療的ケア等の支援を受けられるようになってきた。

しかし、学校教育において、自宅等に教師を派遣する訪問教育を受けていた生徒の場合、学校卒業後は生活介護事業所等に通えないために在宅生活を余儀なくされている。また、病気の進行にともない人工呼吸器等が必要になるなどして通所施設等に通えなくなると、通所施設を退所せざるをえない。

このような重度医療的ケア者の学校卒業後の学びや、社会とのつながりを継続する方法として始めたのが「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」（以下、訪問カレッジ）である。訪問カレッジで学ぶ学生（以下、カレッジ生）の多くは、人工呼吸器等など濃厚な医療を必要としている重度肢体不自由者または重症心身障害者であることから、ここでは「重度医療的ケア者」と呼ぶ。

本年度も重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ」を持続可能な制度にすることを目的に、「①訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム、②運営・地域連携、③人材育成、④理解啓発」の4つの項目で実践研究を行った。

2. 方法

(1) 事業内容

1) 訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ」の運営及びネットワークの間の交流

2) 研究活動（本事業）

①訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム

・ネットワーク会員団体の実践を元にした「他分野連携による生涯学習プログラム」の作成

②運営・地域連携

・「訪問カレッジ」を持続可能な制度にするための制度モデルの研究

③人材育成

・訪問学習の活動事例を、アンケートで募り、それをまとめて事例集（ネット上に公開）を作成

④理解啓発

・実践報告会Ⅰ・Ⅱの開催

・学会等で「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に関する理解啓発

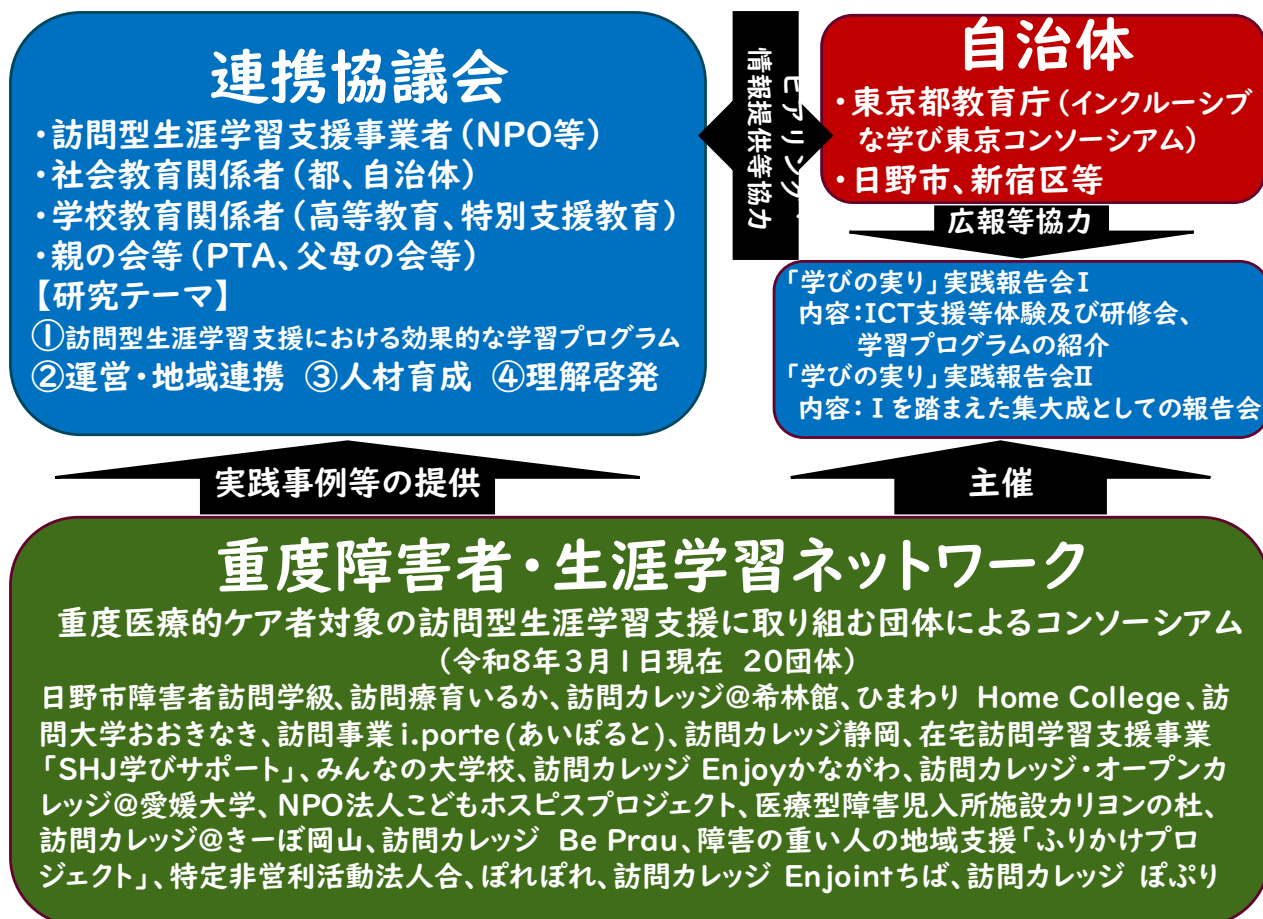
(2) 事業実施体制・連絡先

1) 重度障害者・生涯学習ネットワーク：訪問型生涯学習支援に取り組む20団体（大学、NPO、一般社

団法人等)で組織。

2) 連携協議会: 都内教育関係(都教育委員会、基礎自治体、高等教育、特別支援学校)、親の会、ボランティア団体、重度障害者・生涯学習ネットワーク会員団体等

3. 研究の全体像



Ⅱ 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム

1. 「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」のプログラム開発

昨年度の本研究において、訪問カレッジの実践内容を調査し、プログラムの類型化（見える化）を図った。それにより、①自然科学分野②社会科学分野③人文科学分野④家政学分野⑤文化・芸術分野⑥健康・スポーツ分野⑦言語・コミュニケーション分野⑧「自立活動」に関する分野⑨伝統文化分野⑩校外学習 という整理ができ、より系統的・継続的に学ぶための指標が明らかになった。

また、実践事例として、カレッジ生本人のテーマを中心に据えた「学びマップ」の作成によるプログラムの報告も行い、学びの分野と共にプログラムの組み立て方についても一つの形を提案することができた。

重度障害者・生涯学習ネットワーク会員団体（以下ネットワーク会員）が取り組むプログラム提供の形として、昨年度の実践事例のような個々のテーマに応じたオーダーメイド方式の他に、多様なプログラムの中からカレッジ生が選ぶことができる選択方式がある。どちらも、学びを希求するカレッジ生のニーズが基盤となる。

しかし、内容によっては、ネットワーク会員の学習支援員だけでは対応が難しい。学びの分野を広げることは、カレッジ生にとって学びの視野が広がり、より深い学びにつながる。

障害の重度の方が「学びのテーマ」を広げ深めるための一つの方策として、「連携」をテーマとしたプログラム開発に注目したい。

そこで今年度は、新たな連携によるプログラムの提供として、「専門家や外部機関との連携によるプログラムの開発例」について取り組む。

①専門家との連携によるプログラム開発

例1：プロの音楽家による演奏・歌唱、受講者との合奏を通じて音楽の楽しみ方や表現について学ぶ講座

例2：ICT アドバイザーによるコミュニケーションツールの開発とその活用プログラム

②外部機関との連携によるプログラム開発

例1：大学、大学生との連携

例2：博物館や美術館等の社会教育施設との連携

2. 研究方法

(1) ネットワーク会員が行う訪問カレッジの活動について、次の点に焦点を絞り実践事例を集約する。

○他分野連携機関との協働によるプログラム開発例

<調査内容>

外部機関名、連携の方法（講座・教材作成）、専門分野、受講方法（対面・オンライン）、回数（単発・シリーズ）、事前準備、ICT の活用を調査し、開発したプログラムの内容と効果について検証する。

他分野連携機関については、必要に応じて各都道府県の担当部署に情報提供を仰ぐ。

(2) 実践の集約と分析

- ①ネットワーク会員（20団体）を通じて集約した実践事例を分析し、連携可能な機関と人材、新たなプログラムを提案する。
- ②今後の連携を促進するために「訪問型生涯学習支援の連携リーフレット」を作成する。

3. 結果

(1) 連携の実績と課題

ネットワーク会員が現在行っている「他分野連携による実践事例」を調査したところ、6団体より15の事例報告があった。（調査用紙、【表1】）

【表1】調査用紙

団体名
回答者名 メールアドレス
他機関連携によるプログラムの有無 ☐ ある （ ☐ 個別 ☐ 集団 ） ☐ ない

<共通>

他機関との連携について課題と考えられること
今後連携したい分野・機関がありましたらご記入ください

<あると答えた方>

連携機関名 個人との連携の場合は、所属または背景がわかる内容をご記入ください。
連携に至る経緯
プログラム名
内容
カレッジ生の様子・保護者の感想等
連携機関、授業者の感想
期待される効果

他分野連携によるプログラムを開発するにあたって、現在課題と感じていることについても調査項目に加えた。課題については、現時点で他機関連携を行っていないネットワーク会員の回答と連携を行っているネットワーク会員の記述内容に大きな違いが見られなかった。このことについては、重度障害者の生涯学習を行う上で共通の課題ととらえることができる。【表2】

「特に課題はない」という回答が1件あり、その都度調整しておりスムーズな活動が行われているということであった。

【表2】連携における課題 ◎複数回答

他機関連携における課題 と考えられること	◎事業内容を理解してもらうことが難しい ◎障害理解に時間がかかる。◎交通費、謝礼など資金面 ○持続的な連携 ○カレッジ生の願いにこたえる体制が不十分 ○人材、協力団体の確保 ○授業の工夫と評価の改善 ○「アクセス前提の統合」という視点。生涯学習、社会教育は“みんなのもの”である以上、真の意味で“包摂”についての共通言語をいかにして持つことができるかが課題。
-------------------------	--

課題と感じている事例においては、「**重度障害者の生涯学習に関する理解**を得られるのが難しい」という回答が複数あった。これは、連携機関にとって、「重度障害者の生涯学習」という事業が一般に認知されていないことが大きな要因と考えられる。合わせて、『重度の障害者と自分たちの活動の接点が考えられない、経験がない。』という漠然とした不安を感じているのではないか。連携事例の「連携機関・授業者の感想」（【表3-2】）の中でも、「初めは不安」だった、という声が複数あったことから推察される。

実際、連携したい機関への初めのアプローチで「これは福祉の分野なのではないか。」という声や「重度の障害者と関わったことがないので何ができるのかわからない。」「バリアフリーの環境ではないので難しい。」という対応を経験したネットワーク会員の声も聞かれた。県の連携事業として取り組んだ団体は、担当課（生涯学習課・特別支援教育課）を通じて社会教育施設との連携を進めることができている。行政からの働きかけがあったことで、初めの話し合いの場に着くことができ、具体的な連携につながっている。

「連携に至る経緯」の多くは、ネットワーク会員の知り合いを通じて行われている。その場合においても、前述の課題（重度障害者の生涯学習に関する理解）があげられ、連携推進の難しさを感じた。

神奈川県においては、県立図書館内に「生涯学習相談窓口」が設置されている。利用者の多くは、生涯学習に関する情報を得るための相談ということであった。その一環として、ボランティア活動の紹介も行っている。現時点では、重度障害者からの相談はないということであったが、訪問カレッジの理解が進み、広く「学び」と「学び」をつなぐキー・ステーションのような場となり、そのような機関が増えることを期待したい。

もう一点複数回答があったのが、「交通費、謝礼など資金面」であった。この事業の運営自体がカレッジ生の授業料で賄うことは難しく、各団体が助成金の申請等の工夫により任されている。資金面については、他分野連携を推進する大きな課題となっている。

（2）今後連携したい分野・機関

現在、大学との連携している事例が8ケースと一番多かった。また、今後連携したい機関も大学（大学生含む）という回答が複数あった。実践事例の感想などでも「同世代との交流」が多くあげられており、「**対等な関係性による学びあい**」が求められている。

【表3】 今後連携したい分野・機関

今後連携したい分野・機関	◎大学・大学生、専門学校・学生 ◎文化、芸術分野 ○アウトドア分野 ○企業の仕事体験 ○美術館・公民館・地区センター ○教材づくり(スイッチ等)に関する専門家 ○生活介護事業所(オンラインゲーム)
--------------	---

(3) 他分野連携による効果

実践事例15ケースを項目ごとに整理し【表4-1】【表4-2】にまとめた。

「カレッジ生の様子や保護者の感想」、「連携機関、授業者の感想等」、「期待される効果」については、記述式のため、キーワードやそれを含むキープレーズとなる記載を抽出することとした。

どの取り組みについても、カレッジ生、家族とも肯定的に受け止められている。特に事例として一番多かった「大学・大学生」との連携では「同世代・若者との交流・対等な関係」があげられた。関わる機会が少ない同世代との交流が求められていることが分かった。

他分野連携に求められることとして「交流」「体験」「他分野の専門性との協働」への期待が感じられた。

効果としては「共生社会の実装」があげられる。これまで対象として考えられていなかったカレッジ生の「スポーツ観戦」等が工夫によって実現できたことで、カレッジ生や家族、連携先の意識を変えていったことは、大きな成果である。

【表4-1】連携事例の実態 ◎複数回答

連携先	◎大学・大学生〔8〕 ◎プロスポーツ団体・選手〔2〕 ○アーティスト(音楽、アート) ○ICT 機器・教材製作などの専門家 ○肢体不自由児協会 ○地域(町内会)
連携に至る経緯	◎ネットワーク会員の知り合い ◎自治体との協働事業による紹介 ○社会福祉協議会からの紹介
連携の形態	通常の授業に参加〔8〕、イベントの企画・共催〔3〕、イベントへの招待〔4〕、その他〔1〕 ＊1事例に複数の回答有

【表4-2】キーワード、キープレーズ検出 ＊同じまたは類似のもの太字

カレッジ生様子 保護者の感想 様子	同世代・若者との交流・対等な関係 貴重な経験・体験 充実感に満ちた表情 家族が「一歩」踏み出すよう価値観や姿勢が転換 日頃見せない集中力と表情 本人・家族が「共に楽しむ」可能性 「学びを開かれた形で経験できる」ことは、とても大きな喜び 作品の発表の場 学習意欲参加する機会が保障 保護者には歓迎 当事者も学生の声に深く注意自分から関わり表現 年齢に近い 感謝 楽しみ 非日常の雰囲気（経験） 精一杯の自分を表現 笑顔 動画に注目 興味 行ってみたい 期待 同年代の対等な関係 自然なかかわり 初めての体験 オンライン参加 主体的な取り組み 意欲的に取り組む様子
連携機関・授業者の感想	お互いの学び合い 積極的、好意的 刺激を受ける 「誰もが楽しめる試合会場」「スポーツの感動体験を通じたポジティブな社会変革」 当たり前を選択肢としてある環境 学び合う時間 心の距離が縮まり 自分と一緒に表情やジェスチャーで豊かにコミュニケーション 関わることはそれほど難しくない 感情を共有 「ともに学ぶ」 交流の輪 対等に学び合える場づくり 大きな学び インクルーシブな学校教育の実現 サラマンカ宣言相手の気持ちを尊重 リアルでとても素晴らしい やりがい また参加したい 初めは不安 学ぶ意欲を感じる 今後も連携したい 表情でコミュニケーション 実態に即したプログラム開発は他でも有効
期待される効果	共生社会への実装 重度障害児者の「学び」の概念の問い直し 家族や支援者の価値の転換 スポーツの感動体験を通じたポジティブな社会変革 スポーツ観戦が当たり前の選択肢 自己肯定感 地域や社会の一員であるという感覚 多様性理解や共生意識 学びの発表の場 地域貢献事業 カレッジ生の学ぶ意欲を高める効果 特別な刺激 楽しく充実した気持ち 授業の広がりや深まり

(4) 他分野連携による新たなプログラムの提案

今回、ネットワーク会員より報告があった15事例をもとにリーフレット「他分野連携による生涯学習プログラム」を作成した。

カレッジ生の「ねがい」からスタートし、どのようなところに「相談」し、「対話」を重ねることでより良い「実施」につながるというプロセスと在り方を示した。また、「その他の例」として、発展的な取り組みやプログラム企画の在り方を提案した。

今後、新たに連携を進めたい機関への提案や資料として活用したい。

文部科学省 令和7年度
「他分野連携による新たな障害者の生涯学習のモデル・ネットワーク構築」委託事業

他分野連携による 生涯学習プログラム



私たちは 社会とつながり
学びの世界を広げ 深めることを希望します

誰もが生涯にわたって学び続けることができる社会を目指し
このリーフレットを作りました

重度障害者・生涯学習ネットワーク



ケース1 大学・大学生とつながる

1 ねがい

大学生と一緒に学びたい 交流したい



2 相談

□大学のボランティアセンター・地域交流部署 □医療系専門学校 □社会福祉協議会 他
＊窓口になる先生を紹介してもらいます ＊日ごろの活動の様子を伝えましょう

3 対話



訪問カレッジの授業に参加してみませんか



学生はどんなことをすればよいのですか ボランティア保険は



授業に参加し、互いのことを知り合う機会になればうれしいです
ボランティア保険に加入します



希望する学生がいます 声をかけてみましょう

4 実施

- 待ち合わせの日時、場所を確認 授業の流れやコミュニケーションについて打ち合わせをして、カレッジ生のお宅を訪問しました
- 自己紹介でお互いの好きなことを伝えあうとすぐに親しくなれました
- カレッジ生は、学生の話に興味津々 学生は、学習支援員のサポートをしながら授業に参加しました
- 授業の感想を伝えあい、挨拶をして帰りました

好きな音楽が一緒に
で盛り上がったよ

その他の例

一緒にできる
イベントの企画

大学祭に参加

オンライン講座を企画



実例紹介

ネットワークの仲間が実際に取り組んできたことを紹介します

◆ 大学生がサークルを立ち上げ、継続した訪問がおこなわれています

(カレッジ生・家族) 大学生が運んでくる今どきの話題は、カレッジ生も家族もとても楽しみです

(教 授) 学生たちからサークルの提案があり、意義を理解し行動する姿が頼もしいです

(大学生) カレッジ生のご家族からも温かく受け入れてもらい居心地がよかったです
関わっていくとカレッジ生の伝えたいことがわかり、うれしかったです



◆ 大学と訪問カレッジの共催でイベントを開きました オンラインで参加したカレッジ生も楽しむことができました オープンキャンパスで大学生と一緒に講義を受けました

(カレッジ生・家族) オンライン参加で大学の雰囲気を感じました 真剣に講義を受け、充実感に満ちた表情で満足そうな様子でした

(大学生) 一緒に学ぶ楽しさを共有できてうれしかったです



ケース2 社会教育施設とつながる

1 ねがい

美術館・博物館に行ってみたい
アートを鑑賞したい



2 相談

☐美術館・博物館 総合案内 ☐文化施設の所管部署
＊日ごろの活動の様子を伝えましょう

3 対話



施設のアクセシビリティ情報を教えてください



訪問される方にはどのようなサポートが必要ですか



ストレッチャーを利用しています 休憩スペースがあると助かります
＊具体的に伝え対応策と一緒に考えてもらいましょう



訪問の日時をお知らせいただければ研修室を使うことができるかもしれません
受付でスタッフに声をかけてください

4 実施

☐受付で担当のスタッフに連絡してもらくと、すぐに対応していただきました
☐ストレッチャーでの見学ルートを案内してもらい、アートを鑑賞することができました
☐途中、休憩スペースを利用させてもらい水分注入ができました
☐エレベーターは、スタッフ同行のもと大型の運搬用を利用しました（事前に相談）

＊美術館によっては、特別展で配布した資料をホームページで見ることができます
紹介してもらうのもいいですね

その他の例

出張講座を依頼

公民館・スポーツ施設のイベントに
参加してみよう

新しい「好き」
が見つかりそう



実例紹介

ネットワークの仲間が実際に取り組んできたことを紹介します

- ◆ 博物館や図書館の施設や展示物を撮影し、学芸員の方に解説してもらった教材動画を作りました
学芸員の方がカレッジ生宅で「浮世絵」の講義をする機会も作りました

（カレッジ生・家族）学芸員の解説で「浮世絵」が大好きになりました

（学芸員）重度の障害のある方と初めて関り、解説がこれでよいのか少し不安でしたが、熱心に聞いてもらいカレッジ生の学ぶ意欲を感じました

- ◆ 特別支援学校を会場に出前講座を依頼し、カレッジ生はオンラインで参加しました

（カレッジ生・家族）後輩たちとの学びに、先輩として張り切って受講していました

（連携機関）オンラインを使ったハイブリット講座に、今後の連携の可能性を感じました



ケース3 フロフェッショナルとつながる

1 ねがい

パソコンでゲームを楽しみたい



2 相談

□NPO等でICT支援機器のサポートをしている団体 □社会福祉協議会 等
＊日ごろの活動の様子を伝えましょう

3 対話



どんな支援機器を使うことができるか教えてください



カレッジ生が使ったことのある支援機器はありますか



学校時代に視線入力の経験はありますが、支援員が活用できず使いこなせていません スイッチは、使っています



まずは一緒に訪問して、アセスメントをしてみましょう

4 実施

□NPOの方に同行訪問してもらい授業の様子を見てもらいました
□カレッジ生が操作できるスイッチや視線入力を使った教材の提案がありました
□時々、活用の様子を見てもらい、相談にのっていただいています

その他の例

地域に根差したプロスポーツチームを
応援しよう

オンライン音楽会を
企画してみよう

音楽・スポーツも
ライブで楽しんで
みたいなあ



実例紹介

ネットワークの仲間が実際に取り組んできたことを紹介します

◆プロのミュージシャンにカレッジ生の自宅でコンサートを開いてもらいました オンラインで参加したカレッジ生も楽しい時間を共有しました

(カレッジ生・家族)とても楽しみにしていて、いつもより積極的に関わったり表現したりしていました 音楽が大好きなことを再認識
また来てほしいです

(ミュージシャン)真剣な表情と音楽を楽しむ姿にやりがいを感じました
カレッジ生の学ぶ姿勢にこちらが刺激を受けました



◆プロサッカーの試合を観戦しました

(カレッジ生・家族)本人と家族が「共に楽しむ」可能性が広がりました

(連携機関)これからもスポーツ観戦がみんなの選択肢として当たり前にある環境を作っていきます

ケース4 地域とつながる

1 ねがい

地元のイベントに参加してみたい



2 相談

☐ 町内会・自治会 ☐ イベントの主催者 *日ごろの活動の様子を伝えましょう

3 対話



カレッジで学んだことを活かし、イベントに参加できないでしょうか



どんなことができますか 配慮することがあれば事前に教えてください



iPadを使ったお金の計算や、スイッチを使って挨拶ができます



地域の子どもたちが楽しめるお店を開くので、その担当をお願いします



4 実施

- ☐ iPadに挨拶を録音しておき、お客が来たらスイッチを使って流しました
- ☐ お店に来た子どもたちもスイッチで流れる挨拶に関心を持ったようです
- ☐ iPadを使ったお金の計算は、時間がかかりましたがミスを出さないようにしました

その他の例

地域の活動取材して
動画を作ってみよう

公民館や地区センターで活動している
サークルグループにアプローチしてみよう



分身ロボットを使えば
遠隔操作で参加も
できるね

事例紹介

ネットワークの仲間が実際に取り組んできたことを紹介します

◆ 町内会のお祭りでフードパントリーの受付や、iPadを用いてくじ引き担当として参加しました

(カレッジ生・家族) カレッジ生のできる方法で活動に参加でき、地域の居場所が増えました

(町内会) 体調が心配でしたが、家族や支援員と一緒にしたのでこちらも安心して参加してもらうことができました また、ぜひ参加してください

◆ 地域のマルシェに定期的に参加しカレッジ生が作った製品を販売しています

(カレッジ生・家族) 自分で作ったものが売れると、次は何を作ろうかと楽しみにしています

(主催者) いろいろな方が参加交流できるのが、このマルシェの自慢です



学ぶことは生きること

ユネスコ 成人教育国際会議 「学ぶ権利の宣言」(1985年)

学ぶ権利とは、
読み書く権利であり、
探求し分析する権利であり、
想像し創造する権利であり、
自分自身の世界を解し歴史を著する権利であり、
教育資源を手に入れ利用する権利であり、
個人や集団の技量を高める権利である。

学ぶ権利は、人類の生存のために欠くことのできない道具なのである。

それは基本的な権利の一つと見なされるべきである。学習という行為は、あらゆる教育活動の中核に位置づけられ、人類を、出来事に翻弄されている客体から自らの歴史を創造する主体へと変える。

出典:生涯学習辞典 増補版 日本生涯学習学会 編 東京書籍 一部抜粋

訪問カレッジとは

学校を卒業後、障がいや病気のために通所施設等の毎日の利用が難しい18歳以上の方のご自宅を学習支援員が訪問して、生涯学習を支援する「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」です

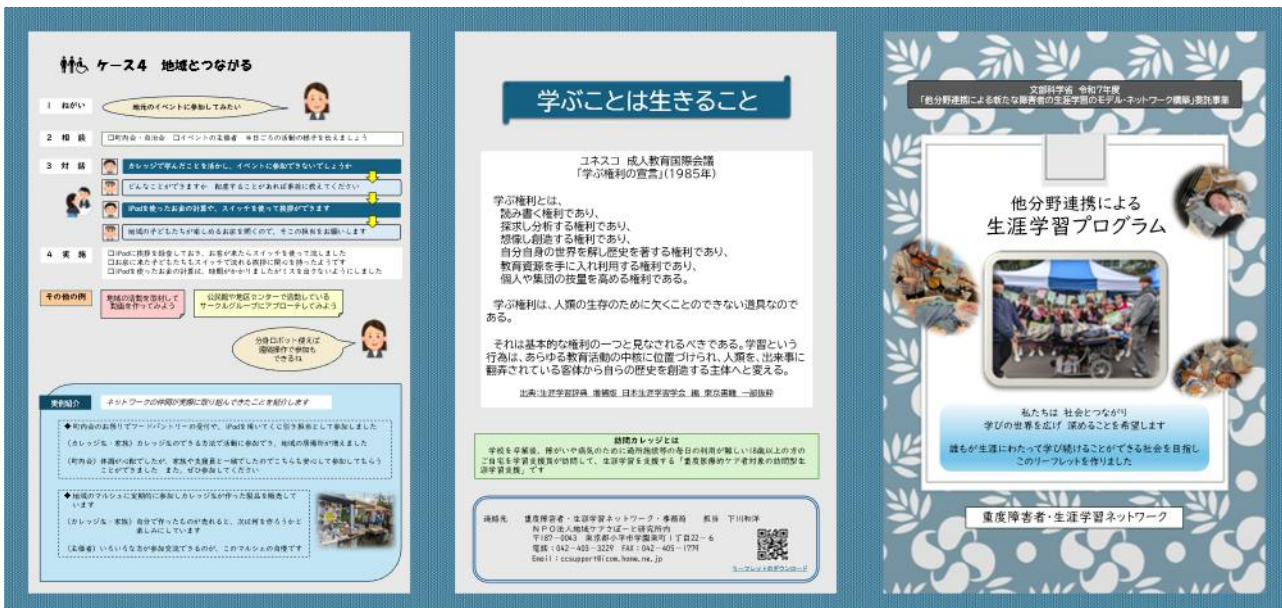
連絡先 重度障害者・生涯学習ネットワーク・事務局 担当 下川和洋
NPO法人地域ケアさぽーと研究所内
〒187-0043 東京都小平市学園東町1丁目22-6
電話: 042-403-3229 FAX: 042-405-1779
Email: ccsupport@icom.home.ne.jp



[リーフレットのダウンロード](#)

【リーフレット完成イメージ】A4判三つ折り

<表側>



<中側>



4. 考察

他分野連携による新たなプログラム開発とは、新たな人や機関との出会いであり、新たな学びを伴うことである。今回の調査で「連携したい分野・機関」に挙げられた「企業」との連携事例は、1件（JFL サッカーチーム）であった。「学びの実り文化祭Ⅱ」のシンポジストとして登壇したセイコーエプソンは、企業の社会貢献として「ゆめ水族園」に取り組んでいる。このような取り組みを参考に、企業との連携の在り方についても探り、新たなプログラムの開発につなげたい。

カレッジ生とネットワーク会員がこれまで積み重ねてきた学びが土台となり、さまざまな分野の人や機関とつながることでさらに学びの世界は広がっていく。今後は、外出が困難な多くのカレッジ生に他分野連携により開発したプログラムを届け、その成果と課題について検証を進めていきたい。

Ⅲ 運営・地域連携

1. 研究テーマ

昨年度、「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援の制度化に向けた提言（案）」を作成して持続可能な制度に向けて、「社会教育スキーム」「障害福祉サービススキーム」「障害福祉と社会教育のハイブリッド」の3つのスキームを示した。

この間、令和7年度に厚生労働省「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」が始まることになった。ネット会員が、事業に取り組む生活介護事業所等に対して協力を行い、厚生労働省の障害福祉サービスにおける訪問も含む生涯学習の一般事業化を目指したい。

そこで、本年度の連携協議会では、「訪問型生涯学習支援の持続可能な事業形態の研究」をテーマにして、障害福祉サービスと社会教育の両面から検討を行っていく。

なお、検討を進めるにあたって課題として2点あげておく。

①終末期（ターミナル）の方の支援

脳腫瘍などにより在宅ケアに移行した方の場合、在宅医療と身体介護の障害福祉サービスが中心になり、本人の生涯学習・自己実現の観点での支援が難しい。

②病院入院・施設入所者への支援

短期入所における遊びや学びの日中支援は認められてきたが、入院・入所者に対しては病院・施設の保育士・指導員が日中活動を行う。しかし、学齢期の院内学級・施設内分教室等ほどの関わりは難しい。そのためご家族は、本人への関わり手が増えることを強く願っている。現在、訪問介護を利用しての園内散歩などは実現しているが、支援内容の充実が求められている。

病院・施設内の日中活動への支援体制の充実が根本的な解決方法である。もしくは、支援のノウハウを持つ外部団体の支援を活用することが一つの方策である。ネット会員の中には、そうした病院・施設への訪問を行っている。この場合、特に課題なのは、感染症対策等の理由から、外部団体を入れることに対する抵抗感である。

【社会教育スキーム】

・根拠法：社会教育法第3条

・予算：国の自治体補助事業（国1／2、都道府県1／4、市区町村1／4）

【障害福祉サービススキーム】

・根拠法：障害者総合支援法に「（仮）居宅訪問型生活介護事業」または、「生活介護事業の一形態としての訪問支援」の創設を求める

・報酬：障害福祉サービス等報酬における給付

・支援体制：令和7年度の厚生労働省「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」では、施策の概要に「生活介護において、特別支援学校教員OB等の雇用やICT機器の導入等により、

生涯学習を実施するモデル事業を実施」とある。特別支援学校 OG 等「学びのノウハウ」の蓄積ある人材の活用である。また、実施要綱には、「生活介護として、体調が悪く通所できない方に対して、訪問での実施も可能とすること」とある。このように、障害福祉サービスである生活介護事業所に対して、訪問教育も含む特別支援学校の教育からの継続した生涯学習が期待できるようになった。

2. 研究方法と記録

(1) 連携協議会の構成員と事務局構成員

年3回の連携協議会を以下の内容で開催した。なお、連携協会の委員は、次のとおり。

① 連携協議会の構成員

氏 名	所 属 ・ 役 職 等	備考欄
飯野 順子	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事長	ネット会員
大嶋 尚史	東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課	社会教育
大村 国博	日野市生涯学習支援課 課長	社会教育
栗田 昌宗	東京都社会福祉協議会・障害児福祉部会・部会長（社会福祉法人天童会・法人事務局事務局長）	社会福祉（ボランティアセンター）
新井 厚子	学校法人 日本教育財団 首都医校 高度看護保健学科	高等教育
阿部智子	東京都立村山特別支援学校 校長（全国特別支援学校肢体不自由教育校長会 事務局長）	学校教育
池邊麻由子	一般社団法人 東京都肢体不自由児者父母の会連合会 会長	親の会
有吉万里矢	全国肢体不自由特別支援学校 PTA 連合会 会長（東京都立光明学園 PTA 会長）	親の会
倉本雅代子	東京都重症心身障害児（者）を守る会 副会長	親の会
藤原 千里	NPO 法人ひまわり Project Team 代表理事	ネット会員
相澤 純一	NPO 法人訪問大学おおきなき 理事長	ネット会員
大石 恒子	日野市障害者問題を考える会 副代表	ネット会員
松本 恵里	認定 NPO 法人スマイリングホスピタルジャパン 理事長	ネット会員

② 連携協議会事務局構成員

氏 名	所 属 ・ 役 職 等	備考欄
藤原 千里	NPO 法人ひまわり Project Team 代表理事	委員兼務
相澤 純一	NPO 法人訪問大学おおきなき 理事長	委員兼務
大石 恒子	日野市障害者問題を考える会 副代表	委員兼務
松本 恵里	認定 NPO 法人スマイリングホスピタルジャパン 理事長	委員兼務
下川 和洋	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所 理事	

(2) 連携協議会記録

1) 第1回連携協議会

①日時 令和7年 6月19日(木) 13:00~15:00

②場所 新宿区立障害者福祉センター(〒162-0052 東京都新宿区戸山 1-22-2) ※ハイブリッド

③本年度の研究テーマと計画

1) 効果的な学習プログラム 2) 運営・地域連携 3) 理解啓発 4) 人材育成

④第1回連携協議会の記録

大嶋委員: 事業が続くには、2つの段階がある。1つ目は、ニーズがある社会全体の認識が広がることが大事。昨年度、都立高校生にインクルーシブ体験プログラムをやってもらったが、担当している NPO 法人も心が折れそうになったことがあるそうだ。学校教育段階から自分たちに見えていない世界を知ってもらい社会に広げていく必要がある。都立学校だけでなく特別支援学校でも始めた。

2つ目。コンソーシアムを運営している中で、公費に頼らないでインクルーシブ事業を展開しているところは企業と一緒にやっている。SDGsは金を出すだけではなく人を出すところもある。会社の風土改革の一環として NPO 団体と連携してやっている。なかなか組織が大きくて小回りが利かないのが東京都。3つの NPO が合同でプログラムに取り組んだり、企業と組んでやったり変幻自在。教育なのか福祉なのかの課題はあるがブリッジをかけてやっている。情報共有して、持続可能な形を探る。

滝口委員(大村委員代理): 日野市障害者訪問学級40数年、青年成人学級を始めて50年、これだけ長い期間継続することができたことに敬意を表す。組織再編で福祉に回した方がいいのではないかとされるが、なぜ教育委員会にこの分野があるのか地に足をつけて考えてみたい。それぞれの事業には目的があるが、学びについては障害があってもみんな一緒であるという意味で大切。社会教育行政の予算は少ないが、継続していきたい。

栗田委員: どの業界も人材がいない。事業継続のために人を集めている状況。重度の障害だと希望者が減り重心の事業が削られる実状がある。知らない人が多い。医療と福祉に教育が入ると複雑、法律の縦割りががあるので難しい。持続可能なものにするためには人の確保と啓蒙が必要である。

下川: 今までは、入所者の生涯学習・自己実現という視点での支援を、施設関係者はあまり意識していなかったのではないかと？

栗田: 施設利用者の日中活動について秋津は飯野先生がいたから話ができたが、他ではどうか。体調管理の方には意識がいくが、日中活動についてはなかなか行きつかない現状がある。効果的なのは保護者が生活を豊かにすることを求めていくことか。

阿部委員: コロナのひどい時に秋津療育園は Zoom で授業をやってくれた。施設の職員の支援で授業が継続でき、授業を画面越しに見てすごいなあと思った。全肢長会で訪問型支援について情報を伝えられないか。地方でも肢体不自由教育の経験のない校長が多く、不安に感じている。広報活動も必要。卒業後のイメージを持ってもらう必要がある。生涯学習のイメージ、自分にとっては高校卒業の次は高等教育、大学進学である。高等教育の学びに触れさせてあげたいという思いがある。

池邊委員：厚生労働省の生活介護モデルの話があったが、生活介護に所属しても通所できていない方が多い施設に手を挙げてほしい。通所施設でも人手不足。福祉の仕事も初めての方を雇う必要がある。重度の方について意思決定支援もやっていく必要がある、ネットワークの持っているノウハウの共有でこの事業が役に立つことを宣伝できればいいのではないか。この事業については、世の中のどの程度の方が知っているのか不安。コミュニケーション支援のために視線入力装置があっても使えない現状がある。生活介護利用モデルを使っていくことが大事である。

山崎久美（有吉委員代理）：PTAの存在についての意識が変わり、全国肢体不自由特別支援学校PTA連合会から退会するところが増えている。将来のことも含めて、PTAの活動に意義を感じていない人が増え、苦勞している。社会制度が整っていく中で、何を選ぶかという考え方になっている。要望書を作成するときに、子どもから大人になる、病院も変える必要があるが次の病院が見つからない、相談事業所も見つからず卒業後も苦勞している、大人になっても豊かに生きていけることを目指したいが予算はあるけれど人がいないなどの問題が起きている。人を育てることが大事で、想いのある人たちが作ってきた歴史を知り、大切さを広めていくことが必要である。

藤原委員：生活介護事業所が、厚労省の生活介護のモデル事業に手を挙げるのは難しいと感じた。2つの施設と相談したが、1つはマンパワー不足で支援するといってもそれ以前の問題があり、もう1つは、生涯学習についての知識がなく、懇切丁寧に説明して申請を出していただけたが、生涯学習に取り組むより、環境整備の方に意識は行っていた。ネットワークの存在、生涯学習について質の高い情報を提供できるようにしていく必要がある。現役のお母さんの意識は弱い。親御さんの意識は福祉サービスの方に向かっている。一方で、保護者の声で医療的ケア児が乗れる通学バスが増えた。保護者の意見は通りやすいので、特別支援学校の方からも生涯学習についてプッシュしていただけるとありがたい。

相澤委員：最近、熊本で生涯学習の話をしたが「訪問カレッジ・訪問大学」というのを聞いたことがある方が1名もいなかった。一方、重度の障害者施設の方から生涯学習の必要性を感じている職員は増えているという話も伺った。地道に発信を続けていく必要性を感じている。教育スキームでは、日野市のような形が理想だと思うが、他の市区町村でなぜ増えないかを知りたい。

大石委員：支援学校の卒業生を受け入れているが、講師の高齢化の問題もあり、支援員を増やすのが難しい。公民館の協力のもと養成講座を行っているが市民を巻き込む形でこれからも行う必要がある。毎年2、3名の方が関心を持ってくださり、支援者を増やすことにつながっている。

松本委員：啓発という点では、まず重症児者の方へのかかわり方が分からないから、しり込みをしてしまうのではないかと。言葉が出なくても内言語があり、やってみたいこと、興味関心があることを伝えていきたい。ハンドブックをNPOで作っているのでも、多くの人の手に届くようにしたい。

佐藤様（文科省）：社会教育と福祉との連携を大切にいろいろな学びの機会を増やしていく必要がある。行政だけでなく民間の取り組みとしても継続していくことは大事だと感じた。啓発活動が大事である。文科省のポータルサイトをいろいろな人に見ていただきたい。

別田様（文科省）：もともと社会福祉の分野にいたが、生涯学習について福祉サイドでも理解が進んで

いない。学びたい気持ちがあっても学ぶ場が少ないことは確か。訪問型をレギュラーにしていける必要がある。障害のある方の人生を豊かにするためににかかわることによって自分の学びにもなるし、気づきにもなる。障害のある方の学びについて発信を続けていきたい。

飯野委員:運営面ではどういう形の手助けが必要かまとめる必要がある。厚生労働省のモデル事業は最終的には個別のサービスにつなげたいと言われていた。サービスが受けられる時がやがて来る。その方向で施策を続けてほしい。運営面では講師の謝金が出せれば 80 パーセント解決できる。もう少し活動を積み上げれば、結果が出てくるのではないかと。ネットワークの活動にかかっている。入所施設の日中活動での学びについて、限界もあるがこうすれば可能になるとも考えられる。地域にどの程度戻せるか検討しているが、どうしても施設に入所しなければならない人もいる。入所している方が時間をどう使うことができるか、考えていきたい。学校とつながる問題であり、卒業後の職員の意識も関係がある。具体的な活動については、10月25日の実践報告会にぜひ来て、理解していただきたい。

2) 第2回連携協議会

①日時 令和7年11月1日(土) 13:00~15:00

②場所 新宿区立障害者福祉センター(〒162-0052 東京都新宿区戸山1-22-2)※ハイブリッド

③本年度の研究テーマと計画

1) 効果的な学習プログラム 2) 運営・地域連携 3) 理解啓発 4) 人材育成

④第2回連携協議会の記録

大村委員:「生活介護利用モデルの作成事業」が発展することで重度の障害のある方に関わるスタッフの雇用が増え、社会で新たに働けるフィードが生まれることを期待している。この流れの中でさらに障害者訪問学級事業を充実させられないか検討していきたい。

栗田委員:入所施設では小さい子から高等部生まで訪問授業をやっていて、それが卒業後まったくなくなってしまう。生活介護の報酬単価は安く、人も足りていない。医療的ケアが増えるほど赤字になる。日中活動の生活介護の報酬の部分を上げてほしい。それに付随して厚労省のモデルケースがマッチすればいい。

下川:生活介護に比べて放課後デイは単価が高い。多機能施設では放課後デイで補っているところもある。利用者の家族が高齢になれば、介護の要求が多くなる、お風呂にも入れた方がいい。生活介護で日中活動が問われている。プラスアルファの人材が外から入れるようになることを期待している。

新井委員:看護師、保健師の教育に携わる。介護の方はできないところに目を向けているが教育はできるところに目を向け、できるところを伸ばす方向に向かっている。生活をどう整え、人生を豊かにしていかに目を向ける。教育の視点が徐々に変わっていった。人を点で見るのではなく線と面で支えていきたい。今、世の中では個性を大事にしていく方向に向かっている。これから若い人にどう育てもらうかが大事。同世代の人のかかわりを強めていくのは大事。世の中が変化していることを医療の面から伝えていきたい。

下川：「リハビリテーション」は、障害のある子は「ハビリテーション」になる。本人のモチベーションは元に戻りたいのではなく、楽しいからやっていきたいに変わっていくべき。

阿部委員：学校では進路先をどうするかが大きい。なかなか親御さんの希望とマッチングしない。進路先の確保が最大の課題。週5日通うのは難しく複数の施設に通う方がいる。卒業に向けて学校として手一杯になる。その時に地域の理解、関係性・ベースが薄い。村山でやっているのは、草の根的な小学校との交流教育で、障害理解に力を入れている。小から大学生まで、障害理解をつなげていくことを地道にやっていくのが大事。介護等体験で大学生を受け入れているが大学生は障害のある方に初めて接することが多い。きよんと立っている。小さい時からの交流をアピールしていく。専門性の前に触れあうこと、難しいことを言う前に知ってもらい、小学校からかかわってもらいを進めていくのが私の役目で地域とのつながりを大事にする。

下川：大学で授業をやっていて、小中での交流はあったか聞くと半分くらいはあったと言う。地域の活動として、Enjoy かながわの朝市、希林館ではフードバンクを地域で取り組むカレッジ生もいる。

池邊委員：保護者の立場として、卒業後の長い期間を充実させるのは大事。訪問カレッジの話をする「自分の地域の方でもあったほうがいい」と必ず言われる。ネットワークの会員が増えていくといい。生活介護の人手不足の話があったが、学びのプログラムの作成ができないのが現状。入浴や食事で精一杯。訪問してくれるのはありがたい。保護者は学ぶことのイメージが持ててなくて学校教育と同じことをしてほしいという声が多い。生涯学習は違うことを知してほしい。

下川：介護現場は人材不足と質の問題。重度訪問介護を受けている時間に「うちの子が殺されるかと思った」という声があった。重度訪問介護は意思を伝えられることが前提。意思疎通が難しい方の権利擁護と意思決定支援をどうするか難しいが、それをやっていかないと生活が豊かになっていかない。

有吉委員：会員を募集する時リーフレットを配るが情報量が多いと読んでもらえないが、これは分かりやすいので光明学園にも配りたい。大学生にはパワーがある。障害のない子のほとんどは大学の4年間でなく社会に出なければいけないのは残念なこと。学びを続けてほしいと願っている。小学部、中学部の副籍制度を活用していくのが大事。日野市に「福祉教育ハートフルプロジェクト」があると聞いている、交流がさかん。そういう制度が広がるといい。自分の息子にはコミュニケーションを取れるようになってほしい。それを卒後にも取り組むのが学びだと思っている。

下川：昨年の報酬改定で意思決定支援に本人も参加しなければならないことになった。

倉本委員：守る会には重度の会員が多く通所ができず自宅で過ごしている方が多い。一步を踏み出し学ぶ楽しみを見つけてほしい。自分の息子は目黒区立油目小学校わかたけ学級に9年間通った。給食も重度障害に対応していて画期的。創立30年で学年交流のカリキュラムだけでなく地域が油目小学校とわかたけ学級に関心を持っていて、先進的な環境にいたのだと思う。生活介護に通っていて、視線入力をやってみたいと思ったのがきっかけ、訪問大学おおきなきとのかかわりができ生涯学習につながった。発作が頻発したが、自分の意思でやろうとする。半信半疑で続けていったがその後伸びていったので、やりたかったことがわかる。最新の支援機器も取り入れた学び、個別の学びが貴重な時間に

なっている。在宅でも施設でも個別に向かい合う時間が大切である。

下川：守る会大会では毎回大会決議に生涯学習について盛り込んでいる。報酬改定に向けて皆さんの声をお願いしたい。

藤原委員：大学との連携について。東京科学大学の学生がひまわり HomeCollege に参加したのをきっかけに学校公認のサークルを立ち上げ、看護科の実習室を使ってオープンキャンパスを開いた。サークルの目的は、自分たちと同世代の障害の重い方が大学に来て呼吸器をつけた学生も含めて講義を受けるという目的で行った。2 回目には文科省障害者学習支援推進室の星川室長や大学の教授も参加し、医学部の生徒にも見てもらいたい活動と言われた。同世代の重度障害者とコミュニケーションを取りたいというのがサークルの動機。3 月にも予定しているが、星川室長からも全国に広げていきたい活動と言われている。でも、大学としては、自分の大学の学生で手一杯で外の学生を呼ぶまでにはいきつかない。取り組みがいいので文科省の委託事業にできないかと話している。施策の制度化に向けて前進できないかと考えている。

大石委員：日野市の委託を受けているので日野市の施策の経過を見守るが、継続が可能になってほしい。施設に訪問しているが、音楽療法の訪問授業を見て、事業所の他の人にも授業を受けさせてほしいという声が出ている。施設が厚生労働省の事業に手を挙げれば実現可能になるのではないかな。

下川：モデル事業で外部人材を生活介護施設に入れていくことによって、そこに加算がつく形が福祉の現場としては制度化の形として実現可能なのではないかな。

相澤：自分の団体がどうしたら継続していけるか考えている。入学申し込みがあったときに誰でも受け入れることはしていなくて、重度の方を優先している。1 か月の授業回数も最高月 3 回で月 1～2 回の方が多い。月 1 回でも成果は上がっている。東京都の場合、東部地区にも訪問カレッジが立ち上がってほしい。ネットワークの団体を見ても一人の想いのある人が中心になって立ち上げられているので、中心になれる方を発掘していきたい。そのためにもさらに発信をしていきたい。

奥野委員：プロのミュージシャンが一般社団法人を作り、訪問授業にゲストティーチャーとして参加してくれている。カレッジ生が楽器に手を伸ばし、楽器を演奏したいということがわかりご家族も支援員も感動した。協力してくれる方が見つかりそうだ。現職教員も退職後の楽しみができたと言っている。

飯野委員：学びの色は十人十色、一人ひとりに寄り添うようにプログラムを提供してきている。一人ひとりが好きなこと、興味関心を持っていて、障害の重い人にも学びたいことがある。学校時代にそれを培ってほしい。施設の日中活動には工夫が必要。卒業後に伸ばしてほしいこと、障害の重い人の学びについてもっと伝えていきたい。学びのニーズは施設の現場からも上がってきている。もっと広い視野と視点で頑張っていきたい。

3) 第3回連携協議会

①日時 令和8年 2月 7日(土) 13:00~15:00

②場所 新宿区立障害者福祉センター(〒162-0052 東京都新宿区戸山 1-22-2)※ハイブリッド

③本年度の研究テーマと計画

1) 効果的な学習プログラム 2) 運営・地域連携 3) 理解啓発 4) 人材育成

④第3回連携協議会の記録

大嶋委員:東京都のコンソーシアムを33団体で形成している。とある障害者の生涯学習や就労支援に取り組む団体は行政にも頼るが民間企業と連携して助成金を活用して持続できている。民間企業は社会貢献プログラムが盛んだがノウハウがないところもあり、専門にやっているノウハウのある法人との連携で持続可能になることも考えられる。

下川:日本は寄付金文化が少ないと言われている。認定 NPO 法人は税金の面で優遇され集まりやすい。イギリスは寄付金文化があったのだが衰退している。

大村委員:中央公民館は60周年を迎えるが課題が噴出している。青年、成人学級や障害者訪問学級は本丸なので継続していく。毎年行っている訪問学級のサポーターを養成するハートフル講座に若い世代や学校の先生の OG の参加もあり、今後の訪問学級の継続につながっていくといい。

栗田委員:全体的に生活介護事業の運営は厳しく撤退するところもある。人の確保も難しい。民間で継続していくのは難しいので、東京都の教育委員会から東京都に働きかけていただき区立施設等で導入することで民間に広げていくことが進めやすくなるだろう。

下川:生活介護は放課後デイに比べて単価が低い。入浴のニーズが高く、それだけで精一杯になっていて、日中活動に手が回らない実態がある。本当はもっといろいろなことをやってあげたいという想いを持っているので生活介護の充実を願ってやまない。

阿部委員:高等部卒業後のことが不安で「タバコ吸わせて留年してもいいですか」という保護者の声があった。教員の指導力をどう活用していくかで学校の現場は手一杯である。でも、卒業後の長い生活の時間を充実したものにしたいという気持ちがよくわかる。校長会や東京都、文科省に生涯学習の大切さを伝えていきたい。

下川:訪問型がないので、生活介護事業所が身銭を切って訪問していたり、身体介護の後にプラスアルファを持ち出してやっているという話を福岡で聞いた。運営が厳しい。

池邊委員:生活介護施設で、視線入力等のテクノロジーを取り組みたいという気持ちを持たれている方はいる。意思決定支援や意思形成支援の考え方を持って使われることを期待している。入所すると生涯学習から遠ざかってしまうことが多い。まず都立施設で介護事業の利用モデルに取り組めるといい。

下川:入所施設は介護中心に回ってしまいノウハウがない。

奥野委員:入所施設に月1回訪問しているが、職員の方も熱心で、入所している方も楽しみに待っていてくれる。日常の中では見られない力を発揮することができる。他の方の取組についても提案させていただいている。

有吉委員:学生証を持つことは素晴らしい。息子が高等部2年で生活介護の施設で実習をしているが、若い利用者が多いところでなじんでいる。一方年配の方の多い施設では反応が弱くなることがあった。同世代の方とのかかわりは大事で、東京科学大学の aile の活動はいい。マイナーなので、情熱を注いでくれる人を見つけることが大事で、最重度の方が取り残されないように伝えていきたい。

倉本委員：持続可能という点では、小・中と通った目黒区立の肢体不自由学級と一緒に活動している上智大学のわかたけサークルがあり、50年続いている。学級を卒業しても 18 歳を超えても活動に参加できる。レクリエーションが中心だが学生がいろいろ工夫している。支援費制度が始まるまでは助成金を活用していたが自立支援法になってから、親のお金と学生のサークル活動費で継続できている。当事者の家族と学生の思いの強さで持続できている。何物にも縛られない自由がいい。

下川：全国守る会の在宅部会では、生涯学習を知る学習会を連続して企画している。

藤原委員：東京科学大学での活動ができるだけ多くの大学に広がるといい。医療系大学の横のつながりに期待できるか。aile の学生がひまわり HomeCollege の学生宅に訪問することを考えている。生涯学習を受けようとしている学生は、豊かな家庭環境がある場合が多い。教育に興味がない家庭では生活に密着していない生涯学習の優先順位は低いのだろうか。生活に直結することから声を出していく段階がある。お風呂と同じくらい大事なことがあることを伝えていきたい。

下川：生活介護に通っている本人が本当に選んでいるのか、疑問を感じている親御さんがいる。若い世代のお母さんもお風呂を願っているようで以前と変わってきている。

相澤委員：東京都福祉局の「デジタル技術でつなぐ就労支援のプラットホーム事業」の報告会で生涯学習の話をしたが就労と生涯学習に接点があることを感じた。ネットワークの中では、みんなの大学校が「働く」と「学び」を並行して取り組んでいる。重度の障害者のかかわりという共通点でつながれるだろうか。訪問授業に毎月2回（2人）の訪問に同行してくれる大学生2人いて、2人で授業を担当できるようになった。対価として、謝金と交通費を渡すことにしたが、どうだろうか。

大石委員：日野市障害者訪問学級でも20数年近く大学のサークルに依頼して訪問授業をしてもらっていた。対価を支払っていた。最近でも大学生の講師に謝金を払っている。昨年から公民館の管轄になっている。ハートフルサポーター養成講座を行ってきていて、市民の方に呼びかけ、毎年1～2名が講師になっている。自分もこの会に参加してから講師になったが、障害者訪問学級を知らなかった。他のカレッジでは退職教員がほとんどだが3分の1程度にとどまり、あとは市民。これからは資格を問わずに呼びかけていきたい。人工呼吸器の利用者と接するのが初めてでも十分やっていける。

奥野委員：訪問カレッジ Enjoy かながわは県の協働事業を受けている。生涯学習課には県立歴史博物館を紹介してもらい重度の方の訪問に同行してもらった。特別支援教育課との協働として、学芸員の方が特別支援学校で授業を今まで3回やっている。誰でもアクセスできる歴史博物館にしたい、障害がある方も来てもらえるようにしたいという想いでかかわってくれている。協働事業になったことでカレッジ生が学びを広げることができている。また、公民館としては、来れない方に公民館がどうかかわっていくか考えてくれている。障害のある方の持っている力はすごく、関わった人の意識を変える力を持っている。

下川：連携協議会は神奈川で2年間、東京で2年間行った。東京は神奈川のように協働事業にするのは難しかった。

飯野委員：ネットワークの20団体はバラバラであるがつながり合っている。それぞれの団体の経営面や今後について考えると、お金についてはゼロから始めているところもある。来年度はもっと具体的に持続可能にできるように考えていきたい。今後もつながっていけたらいい。

下川：生涯学習について誰にでも説明できるようにしていきたい。

Ⅳ 人材育成

「どのような専門性を有する者がコーディネーターの役割に適しているか」、「具体的にどのように配置・活動すべきか」等、成果報告書を見据えた展望を視野に入れて研究を進めた。

Ⅰ. コーディネーターの活動やボランティアの育成・活用等の内容

各団体としてはそれぞれの課題を今年も独自に追及することとするが、人材育成担当として、昨年度の成果をもとに、今年度さらに人材育成を直接視野に入れて、活動することとした。すなわち、昨年度実施したアンケート調査（国立大学の特別支援教育教員免許状取得課程を持つ大学 50 校と当ネットワーク関連を持つ大学、計 60 数校への重度障害の生涯学習に関するアンケート）の結果によれば、大学の先生方の重度障害者の生涯学習への興味関心は大変高く、更に学生をボランティアとして派遣することへの関心は 7 割を超えていた。その上でアンケートの回答理由文面からは、重度障害者に対応する際に必要なことをあらかじめ事前に学生に学習させたいとの思いも強く、しかしその準備の時間的余裕の不足などがネックになっている、という大学事情が垣間見えた。

そこで、今年は当ネットワーク団体のそれぞれの持っているノウハウのうち、特に初心者の方にもわかりやすく、やりやすい訪問学習の活動事例を、アンケートで募り、それをまとめて事例集（ネット上にも公開）を作することをめざした。また、この事例集紹介のチラシを作り、そのチラシを当ネットワーク紹介のチラシとして印刷、ネットワーク団体へ送付し全国のネットワーク団体の近隣の大学等への配布を計画、実施した。大学生くらいの予備知識ですぐにできる活動などを中心として、対象のカレッジ生は、身体症状も知的症状も重い方々とした。

あくまでも初めての人を対象とするので、難しい言葉などを使わずに、しかし内容はあくまでも正確かつ率直に、また豊かな人間性が伝わる、有意義な楽しい活動という側面を強調して記述したものとなるようにしていきたいと考えていたが、想像以上に素晴らしい実践が集まり、有意義な事例集が出来上がった。

このうち数例を写真とコメントと共に載せたチラシを作製、印刷して団体に配布した。明るい誌面で若い人に対しても好評であった。チラシには上記の事例集が見られるように二次元コードを付けている。

出来上がった段階でチラシの画像と、事例集の二次元コードを添付したメールを、昨年度にアンケートに回答して下さった教員の方々すべてへ送付した。また、昨年度アンケートを送付した国立大学特別支援学校教員免許状取得課程を持つ大学 50 校のすべてに対して送付した。数校から丁寧なお礼のメールを返信していただいた。一方どのように対応されたか不明の大学・学校も多い。

今年度の活動のまとめとして、ネットワークからの働きかけとしてはここで一区切りとなると考えている。次の段階としては実際にすでにボランティアとして大学生が参加している事例についての検討が必要になると思われる。

次に、今年度新たな段階に至った事例について報告する。

重度障害者・生涯学習ネットワーク

生涯学習

わたしも、ぼくも、学びたい！
新しい発見がたくさん！



ipadとスイッチ



創作



視線入力



音楽



書道



読書

お問い合わせ先 重度障害者生涯学習ネットワーク団体名簿 (2025.9)

	事務局所在地	事業名	事業代表者名	メールアドレス
1	東京都・日野市	日野市障害者訪問学級	大石 恒子	oishigengo10410@yahoo.co.jp
2	東京都・杉並区	訪問療育 いるか	栗山弘子	kujira@kasumiso.tokyo
3	東京都・小平市	訪問カレッジ@希林館	下川 和洋	ccsupport@jcom.home.ne.jp
4	東京都・新宿区	ひまわり Home College	藤原 千里	chisato-fujiwara@hotmail.co.jp
5	東京都・大田区	訪問大学おきなき	田中千加子	taiju06wa01@b07.tscom.net
6	東京都・昭島市	NPO法人こどもホスピスプロジェクト	佐藤 良絵	yoshie@angels-heaven.jp
7	東京都・杉並区	在宅訪問学習支援事業「SHJ学びサポート」	松本 健太郎	piyolinhn@smilinghpj.org
8	東京都・国分寺市	みんなの大学校	引地 達也	hikichi.shalom@gmail.com
9	神奈川県・横浜市	訪問カレッジ Enjoyかながわ	成田 裕子	jimukyoku@kenshikyou.jp
10	神奈川県・川崎市	訪問事業I:porteあいぼろ	岡安 玲	khb02557@nifty.com
11	埼玉県・越谷市	特定非営利活動法人合	田井寿美江	ai0314tai@gmail.com
12	埼玉県・さいたま市	医療型障害児入所施設カリヨンの杜	福島 健	t-hukushima@ohfukai.jp
13	埼玉県・川越市	訪問カレッジ ぽぷり	熊谷 瞳	popuri.houmoncollege@gmail.com
14	埼玉県・さいたま市	訪問カレッジ Be Prau	西村理佐	care.no.hakobune@gmail.com
15	千葉県・千葉市	訪問カレッジEnjoint ちば	木川純子	junko@zf6.so-net.ne.jp
16	静岡県・静岡市	訪問カレッジ静岡	瀬戸 正勝	setowaki@wh.comumfa.jp
17	新潟県・長岡市	ばれぼれ学習会	田村美奈	tamura mina324@gmail.com
18	兵庫県・明石市	障害者の重い人の地域支援「ふりかけプロジェクト」	十田朋也	akazu720@gmail.com 10tatomoaya@gmail.com
19	岡山県・岡山市	訪問カレッジ@きー岡山	真見圭子	mike.nagasaki@gmail.com
20	四国 愛媛県・松山市	訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学	千葉菜保(事務局)	houmon.college.eu@gmail.com

絵本作り



完成した絵本を一緒に読みました。読んでいる時は、集中していて、動く仕掛けのところでは目で追っていました。

指筆アート



画面いっぱいに指を運んで「アハハ！」と声を出して楽しそうな笑顔を見せてくれました。そんな時は支援者もとても嬉しくなります。作品鑑賞タイムでも一緒に「いい色合いだね～」と、共感していました。

重い障害のある方たちと学ぶ

障害のある方の自宅に訪問して支援者と一緒に学習してみませんか？
重い障害がある人は、ことばでのやり取りや手足の動き等に困難がありますが、工夫次第で楽しく一緒に学べます。
“生きることは学ぶこと、学ぶことは生きる喜び！”
詳しくは以下のQRコードから。



ICT：好きな音楽を楽しもう



スイッチを操作して動画を変えていながら、気になるアイドルの曲の動画が流れるとスイッチの操作を止め、最後まで動画を見ながら曲を聴いています。

二人三脚！一人ですでないところは一緒に！



人の手がたくさんあれば、色々なことが体験できます。腕に手を添えるだけでも、繋がっているように感じます。

胃ろう



吸引



呼吸器



気管切開



2. オープンハートキャンパス実施報告 NPO 法人ひまわり Project Team 『ひまわり HomeCollege』

(1) イベント概要

2025 年 5 月、東京科学大学 湯島キャンパスにおいて、ひまわり HomeCollege の学生とインターカレッジサークル aile の学生が共に学ぶ、第 1 回「オープンハートキャンパス」が開催された。

本イベントには、呼吸器を使用し在宅で学習している学生も参加し、自宅以外の場において対面で学ぶ機会を実現した。これまで学びの場が家庭内に限られがちであった学生にとって、大学という開かれた環境で学ぶ経験は非常に貴重であり、学習の継続や社会参加の観点からも大きな意義を持つものであった。

主催した学生団体「aile」は、ひまわり HomeCollege の活動への参加を契機に誕生した、東京科学大学公認のインターカレッジサークルである。学生主体で企画・運営が進められ、同世代がともに学ぶ場を創出する新しい取り組みとして位置づけられている。

(2) 実施内容

講義は、ひまわり HomeCollege の学生と大学生・大学院生が一つのグループとなり、同じテーブルで受講する形式で実施された。単に「支援を受ける側・支援する側」という関係ではなく、同じ受講生として机を並べることを重視した構成となっていた。大学生とひまわりの学生が「同級生」として同じ学習体験を共有することで、自然な形で交流が深まり、相互理解が促進された。

講義の進行の中でも、会話や反応を通じた双方向の関わりが生まれ、共に学ぶ空間が形成されていった。第 1 回講義では、物理分野の「光」をテーマに、偏光板や分光シートなど、視覚的情報を刺激する教材を用いて光の変化を学んだあと、万華鏡を制作する体験型講義を実施し、サイエンスコミュニケーションの実践が試みられた。学習内容を体験と結びつけることで、理解を深めながら楽しめる講義となっていた。

第 2 回講義では、「ファンカルチャー」を題材とした社会学的講義を行い、いわゆる“推し活”について学ぶ内容で、会場は大いに盛り上がった。身近な文化を題材とすることで参加者の関心が高まり、世代を超えた共感や対話も生まれた。いずれの講義も講師は学生が担当し、同世代の得意分野や関心に基づきテーマ設定が行われていた。また、演習や体験的要素を取り入れることで、参加者が主体的に関わることができる構成となっていた。

(3) 安全管理体制

開催にあたっては、受講生の医療情報を事前に共有し、小児科医が配置されていたことで、体調変化への対応を含めた安全面に十分配慮されていた。医療的ケアを必要とする学生が安心して大学で学ぶためには、こうした事前準備が不可欠である。いずれも大学関係者の深い理解と協力のもと、安心して参加できる環境が整備されていた。

講義終了後には見学者から、「多くの医学部学生にもぜひ参加してほしい取り組みである」との高い評価を得た。本取り組みが教育的意義を持つことが、大学関係者からも示された。

(4) 参加の意義と成果

① ひまわり HomeCollege の学生への効果

今回、ひまわり HomeCollege の学生がオープンハートキャンパスに参加できたことは、単なる交流イベントにとどまらず、「学びの継続」を体現する重要な機会となった。学習の場が大学へと広がったことで、

生活の中に新たな目標や楽しみが生まれる契機ともなった。また、「大学で学ぶ」という経験そのものが自己肯定感を高め、「自分も学びの場に立てる」という実感と自信につながった様子がうかがえた。普段とは異なる環境で学ぶことが刺激となり、積極的な姿勢が引き出され、普段以上の集中力や笑顔が見られるなど、学びへの意欲が一層高まった。こうした学習を通じた達成感や充実感が得られたことは、大きな成果である。

さらに、大学生との交流を通じて新たな関心や楽しみを見い出し、「地域社会の一員として迎えられている」と感じられたことも、参加者にとって大きな収穫となった。

②保護者への効果

保護者にとっても、これまで教育や社会参加の機会が限られてきた中で、「学びを開かれた形で経験できる」ことは大きな喜びとなった。子どもが社会とつながりながら学ぶ姿を見られることは、将来への希望にもつながるものであった。

③大学生(aile)への教育的効果

本交流は、aile の学生にとっても貴重な学びの機会であった。学生自身が企画・運営に関わる中で、ひまわりの学生とともに受講する時間を通して、多様性への理解や共生意識が育まれ、将来医療職を志す学生にとって、教育やキャリア形成にもつながる重要な経験となった。

臨床実習では「支援が必要な患者」という側面に目が向きがちであるが、重症者が元気に活動し、興味を持って他者と関わる姿を知ることは、専門職にとって重要な視点である。学生には「患者として」ではなく「同じ若者として」向き合い、ともに学び、ともに楽しむ時間を持ってほしいと考える。

(5) 課題と今後の改善点

本取り組みを通じて、大学という場を活用した「共に学ぶ機会」の有効性が示された一方で、継続的な実施および他大学への展開に向けて、今後整理すべき課題も明らかとなった。特に、医療的ケアを必要とする学生が安心して参加できる環境を維持するためには、安全管理体制の手順をより標準化し、大学内外の関係者が共有できる形で整備していく必要がある。

また、参加者が増加した場合に備え、運営を担う学生や支援者の役割分担、合理的配慮の提供方法についても、今後さらにノウハウを蓄積していくことが求められる。加えて、本事業の成果をより客観的に示していくため、参加者の学習意欲や交流の広がりといった効果を把握する仕組みを整え、継続的な評価につなげていくことが重要である。

今後は、これらの点を踏まえながら、医療的ケアを必要とする学生がより安心して学びに参加できる機会として、本取り組みが安定的に継続・発展していくことを期待する。

(6) 今後の展開

2025 年 8 月に開催された第 2 回オープンハートキャンパスでは、文部科学省をはじめ多くの関係者に視察いただき、本取り組みは大きな注目を集めている。

大学というリソースを活用した「共に学ぶ場づくり」の可能性が広がりつつあり、本モデルが他大学へも波及することで、重症者にとっての学びの選択肢が全国的に拡充し、共に学ぶ社会の実現につながっていくことが望まれる。

(7) 今後の計画

現在、aile の学生は、共生社会の実現に向けて主体的に活動の幅を広げている。

来年度は、文部科学省の「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」において、オープンハートキャンパスの継続実施に加え、他大学への展開・拡大に向けたノウハウの創出を目的とした申請を、東京科学大学より行うことが決定している。さらに、学会での発表も予定されている。

今後もひまわり HomeCollege は、大学および aile と連携しながら、本取り組みを継続的に支援していく方針である。

aile（エール）は、大学生と重度障がいのある同世代が交流することを目的に活動する学生団体です。共生社会の実現に向けて、「学ぶこと」「人とつながること」を大切に活動を行うとともに、障がいについて知ってもらおうことを目指しています。

活動内容



オープンハートキャンパス

重度障がいのある若年層は高校卒業後に学習や同世代の交流の機会が著しく限られ、大学進学を含む様々な面で非常に狭い現状があります。大学生と重度障がいのある同世代がともに学び交流できるイベントを企画・開催しました。この活動を通して私たちは、大学というリソースを活用して共生社会の実現に向けた開かれた学びの場を作ることを目指しています。

高校を卒業した重度心身障がい者の生涯学習の場への参加
重度心身障がいのあるお友達を持つ保護者の方が運営している「NPO法人ひまわりProjectTeam」の活動の一つであるひまわりHome Collegeに参加しています。高校を卒業した重度障がいのある若年層が学び続けられる場所を作ることが目的です。スポーツや音楽療法を通して、同世代と交流しています。



勉強会

大学生が障がいや医療のケアについて学び、身近に感じることができるよう、勉強会を企画しています。講師には、小児在宅医療に関わる看護師、障害児・者のために活動するNPO法人の代表、日常的に手話を使用している方など、さまざまな立場の方をお招きしています。



他にもお花見やクリスマス会などの季節のイベントでの交流や重度の障がいをもった子供たちとの活動など幅広く活動を展開しています！

団体概要

- ・メンバー：28名
- ・所属：東京科学大学、お茶の水女子大学、武蔵野美術大学、桐朋学園大学、東京大学の学部生・大学院生
- ・東京科学大学公認同好会インカレサークル
- ・文京区社会福祉協議会とつみコム登録団体
- ・2024年設立

メンバーの声

様々な分野の学生がそれぞれの強みを活かして活動しています。

自分自身医学系ではなく、理工学系の出身ですが、aileでは普段の学校生活では得ることのできない多くの経験をさせていただいています。特にオープンハートキャンパスでは講師という立場から同世代全員が学びの場を通して交流をするという場の作り手の一員として一から挑戦を考えました。工学と医学の融合を身近で経験でき感謝一杯です！

医学科6年で入部しましたが、小児科医を目指すにあたって小児科から成人期への移行に関する知識の構築や経験を活動を通して学び、分野にとらわれない多くの学生と活動が共にすることができました。貴重な経験がありがとうございました！

aileの魅力は同世代との繋がりにあると思います。普段の活動で障がいの有無に関わらず様々な手段でコミュニケーションを図り、活動の楽しさや達成感を分かち合っている仲間が私の大好きなaileのカチです。また、インカレということもあり、他大生と協働して団体の運営をすることも貴重な経験になっています！

メンバーを募集しています。

aileでは医学系の学生との交流だけでなく、他の分野を学ぶ学生との交流が盛んに行われている学生団体です。自分たちで計画・運営しながら先輩、後輩、同期と和気あいあいと活動しています。私たちが是非一緒に活動しませんか？メンバー一同お待ちしております！！

学生団体aile

HP:<https://aile-15.jimdofree.com/>

Gmail: aile.link20@gmail.com



V 理解啓発

1. これまでの取組の成果

これまで、訪問カレッジに関する研究成果の普及及び理解啓発のために、日本特殊教育学会の「自主シンポジウム」と「医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」を開催してきた。

令和4年度からは「医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」に、「訪問カレッジ『学びの実り』」を加え理解啓発イベントとして開催してきた。イベント等により、重度障害者の生涯学習に関する関心は広がってはいるが、認知は一部にとどまり、「学習」という言葉によって「学習＝学校教育」という狭い理解のされ方も根強いことが明らかになった。

昨年度は、「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」として開催し、訪問型生涯学習支援等に取り組む会員団体の紹介と学生の学びを紹介し、ICT 支援機器・教材・玩具体験コーナーも設置し、コミュニケーションツールに関する相談支援も行った。参加後のアンケートにより、「誰もが豊かに生きることができる」という「学び」に対する本質的な理解と、どんなに重い障害があっても「誰もが豊かに生きる」という普遍性に対する理解が、参加前に比べ深まったことがわかった。

そこで今年度は、私たちが実践を通して培った生涯学習のノウハウや支援のツールを、多くの方に届けられるよう、人材育成の視点を大切に、ネットワーク団体の各地で、実践報告会を開催し、重度障害者の学びの場や機会の拡大を全国的なうねりに発展させることを課題とした。

2. 実施方法と内容

実践研究の成果等の普及方法として、日本特殊教育学会等における発表と実践報告会を開催する。実践報告会は、次のように実践報告会Ⅰと実践報告会Ⅱで構成する。

①訪問カレッジ「学びの実り」実践報告会Ⅰ

- ・ネットワーク会員団体により全国5か所で開催
- ・対象者は「障害の重い方と関わる支援者（教育・福祉・医療関係者）、障害のある本人・家族、大学生や専門学校生、生涯学習に関心のある方（一般）」とする。
- ・内容は「ICT 支援やコミュニケーション支援に関する体験及び研修会」「訪問カレッジ等で実践している学習プログラムの紹介」など

②訪問カレッジ「学びの実り」実践報告会Ⅱ

- ・実践報告会Ⅱは、Ⅰを踏まえた集大成としての報告会を1か所で開催
- ・対象は、「県内市町村及び関係社協の後援・来賓、ネット会員関係団体、ネット会員関係団体が各地で連携している博物館、公民館、図書館等の社会教育機関、大学、文化芸術、スポーツ団体にも参加を依頼、障害の重い方と関わる支援者（教育・福祉・医療関係者）、訪問カレッジに係る関係大学の大学生の参加、生涯学習に関心のある方（一般）」とする。

3. 実施記録

(1) 日本特殊教育学会 第63回大会(水戸大会) 自主シンポジウム「障害の重い人の生涯学習」(8)

・日時:令和7年9月13日(土) ・場所:水戸市民会館 ・参加者:約30名

障害の重い人の生涯学習(8)―生涯学習を持続し豊かにしていくための人材育成について―

企画者 三科聡子(宮城教育大学教育学部) 石川政孝(NPO 法人訪問大学おおきなき)

相澤純一(NPO 法人訪問大学おおきなき)

司会 三科聡子 (宮城教育大学教育学部)

話題提供者

大石恒子(東京都日野市訪問学級・重度障害者・生涯学習ネットワーク)

松本健太郎(スマイリングホスピタルジャパン「学びサポート」)

奥野康子(訪問カレッジ Enjoy かながわ)

佐藤英明(文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室)

指定討論者 飯野順子(重度障害者・生涯学習ネットワーク・NPO 法人地域ケアさぽーと研究所)

【企画趣旨】過去7回の本シンポジウムの企画では、障害の重い人の生涯学習の取り組みの立ち上げから今までの発展の経緯や全国各地の取り組みの全体像を把握することに努めてきた。

関東近辺では東京都、神奈川県を中心として、2024年に埼玉県で、2025年4月に千葉県で訪問カレッジが立ち上がった。

今回のシンポジウムでは、障害の重い人の生涯学習の機会(場)を継続していくために基盤となる人材育成にスポットを当て、障害の重い人の生涯学習の制度化を意識した議論を行いたい。

【話題提供1 東京都日野市障害者訪問学級】

令和6年度、重度障害者生涯学習ネットワークの一員として、人材育成に係るアンケートを全国の国立の特別支援学校教員養成課程を持つ大学50校の教員と、ネットワーク関連の大学・専門学校教員を対象に実施し55件の回答を得た。主に重度障害者生涯学習(訪問)にボランティアとして大学生を派遣することについて認知度と関心を聞いた。重度障害者の生涯学習への希望などの認知度は高いものの、実際の生涯学習の実施団体についての認知は低かった。先生自身が生涯学習に持つ関心は高いが、それよりも学生に参加させることへの関心がより高く、今後に期待が高まった。ネットワークとしても今後大学生のボランティアの育成により力を注ぎたいと考えている。

【話題提供2 SHJ 学びサポート】

人材育成については障害の重い方との教育的かかわり合いの魅力を伝えることがまず必要だと考える。肥後(2015)は、個別性が高い子どもとの教育的かかわり合いにおける支援者の資質として、「次々と新たなアプローチの具体策を思いつくセンス」を挙げ試行錯誤の力こそが特別支援教育の専門性だと述べている。本団体では特に教材及びその提示の工夫がかかわり手の最大の課題と捉え、教材を介した教育的かかわり合いにおける試行錯誤の魅力を冊子、活動報告書、教材販売、学習場面の見学受け入れを通して広く共有している。話題提供では本団体の人材育成の工夫を紹介しながら教材を介したや



り通りの魅力を参加者と共有した。

〔文献〕肥後光一（2015）通じ合うことの心理臨床改訂版．同成社．

【話題提供3 訪問カレッジ Enjoy かながわ】

神奈川県内を対象に障害の重い方の訪問型生涯学習支援として 7 年目を迎え、現在25名のカレッジ生は、それぞれの学びを楽しみ、生活の一部として位置づけている。

学習支援員に限らず多様な人材が関わることは、学びを豊かに広げ深まることから、ボランティアやゲストティーチャーの参加を積極的に取り入れている。その方策としてのボランティア講座の開催や大学連携について紹介した。

また、昨年度より神奈川県の協働事業に採択され、歴史博物館や図書館との協力による教材動画を製作した。出かけることが困難なカレッジ生にとって、新たな社会資源活用の形が生まれ、学芸員の出張講座へと発展している。その取り組みについて話題提供した。

【話題提供4 文部科学省障害者学習支援推進室】

文部科学省では平成 29 年度より障害者の生涯学習支援政策に着手し、平成 30 年度から「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」を開始した。令和7年度は、これまで実施してきた都道府県中心の地域コンソーシアムによる支援体制構築に加え、新たに他分野連携による新たな障害者の生涯学習のモデル・ネットワーク構築、障害者の移行期の学びのモデル事業の2メニューを追加し、計 31 団体に委託して事業を推進している。

移行期の障害の重い人への学びの重要性や、障害の重い人を対象とした委託団体の事例について話題提供する。これまで文部科学省の取組の成果を踏まえ、今後の施策の方向性について報告した。

【指定討論】

- ① 人材育成にあたって、望ましい資質は、どのような能力なのか、明確にすることが求められている。
- ② 厚生労働省が、「生活介護利用モデルの作成事業」を立ち上げている。その中で、生涯学習プログラムの開発・実施にあたっては、「重度障害者・生涯学習ネットワーク」など、重度障害者の生涯学習に関して実績や知見を有する団体等と連携することが望ましい」と明記された。このことに応える具体的事項は何か、明確にする必要がある。

【質疑応答・協議】

① 愛媛大学（樫木先生）

愛媛大学には、各地域での事業所や社会教育施設の後方支援が求められている。訪問教育の在籍者数が減っていて、通学できているが卒業後通う場所がなくなるケースがある。

② 三重大学（菊池紀彦先生）

学びの観点から考えると大学は多様な入り口を持っている。学校にもっと積極的にアプローチできるのではないかと。重度障害者も進学できる。

三重大学は総合大学で看護学科と特別支援教育学科が連携し、就学前の医ケア児の支援をしているが、1～2年かけてかかわれるようになる。

③ 立教大学学生（ゼミ）

ボランティアをするためのパンフ作成の研究。専門性だけでなく同年代だからできる支援。ただ福祉に頼ると自己実現が難しい。よりよい連携。

④ 水戸生涯学習センター

専門性の前に触れ合うことを通して、広がり・つながりができる。

(2) 実践報告会 I

1) 実践報告会 I の内容 (案内チラシ)

① 神奈川：訪問カレッジ Enjoy かながわ

文部科学省令和7年度「他分野連携による新たな障害者の生涯学習のモデル・ネットワーク構築」委託事業
『重度知的障害者対象の訪問型生涯学習支援』に関する実践研究
訪問カレッジ「学びの喜び」実践報告会！ In かながわ

**「学ぶことは 生きること」
～障害の重い人に関わる魅力と
可能性を引き出すツール～**

日時 令和7年7月12日(土) 13:00～17:00
会場 神奈川県社会福祉センター 4階 401、402
横浜市神奈川区反町3-17-2
東急東横線「反町」駅 徒歩1分

対象 障害のある方の生涯学習に関心のある支援者
(大学生・専門学校生、社会教育機関、大学、学校、療育機関関係、ご家族等)

申込み方法 右のQRコードより参加申込みをお願いします。
参加費 無料

日程

13:00～	挨拶 趣旨説明 講師紹介
13:10～13:30	●実践報告 訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ Enjoy かながわ」
13:30～15:00	●講演「教材・教具を通して障害の重い人にかかわる魅力」 講師：認定NPO法人スマイリングホスピタルジャパン 「SHJ」学びサポート コーディネーター 松本健太郎
15:10～16:40	●講演「障害の重い人のスイッチの活用」 講師：ICT救助隊
16:40～17:00	質疑応答・まとめ

講師：松本健太郎
肢体不自由特別支援学校員、SHJや筑波大学発達研究家、専修大学教育研究所の教育相談に参画、障害の重いといわれる方々の教材を介した教育的なかわり合いの面白さや豊かさを知りたい。

講師：ICT救助隊
重度障害者・難病ALS等のコミュニケーション支援を目的に活動しているNPO法人です。必要とする人それぞれに合わせたコミュニケーション機器操作や操作スイッチの工夫を主に行い、吉友のための講座や個別のサポートも行っています。

問い合わせ先 NPO法人フュージョンユウかながわ・泉蔵協「訪問カレッジ Enjoy かながわ」
TEL:045-311-8742 Eメール:jimukyoku@kenskikyoku.jp

② 岡山：訪問カレッジ@きーぼ岡山

令和7年度
「肢体不自由児者のためのICT活用推進研究会」主催 研修会

「肢体不自由児者のためのICT活用推進研究会」主催の ICT 活用事例発表、スイッチの制作研修会を開催いたします。
個々に応じたスイッチの制作や情報交換等を通して、肢体不自由児者の生活の質の向上を目指したいと思い、企画いたしました。多くの方の御参加をお待ちしております。

期日：令和7年8月4日(月) 10:00～16:00
(受付 9:30～9:55)
場所：本校会議室・視聴覚室・自立活動室2
内容

〈岡山支援学校 公開講座として行います〉

10:00～11:45 福島勇先生講演会(熊本高等専門学校)(オンライン：会議室)
・「視線入力」「iPadアプリの活用」などの事例紹介
・ICT機器を活用した活動の事例紹介
(公開講座のため、教職員以外の方は、後日アーカイブ配信を予定しています。)

12:45～13:15 支援機器展示・体験会(視聴覚室)
・岡山支援学校で活用している支援機器(自作のものも含む)の展示・体験
・視線入力ゲーム Game_02「アステロイド」、誰でも野球盤3Dの展示・体験

13:30～14:20 重度障害者・生涯学習ネットワーク所属
「訪問カレッジ@きーぼ岡山(CAPプロジェクトおかやま)」事例発表
・「生きることは学ぶこと。学ぶことは生きる喜び。生涯にわたって、学び続ける喜びを」重度障害者・生涯学習ネットワークのこの願いに強く共感して、岡山で活動している団体の事例発表

14:30～16:00 スイッチ制作研修
・B/Aアダプター(700円)(50分)
・おにぎりケーススイッチ(1000円)(50分)
・プットインスイッチ(400円)(60分)
・小型スロープ発射装置(サッカーやボウリングに利用)(500円)(60分)
・引っ張ってぱち(タンブリンを鳴らす装置)(1000円)(60分)
上記スイッチから制作したいスイッチを1個を選択していただきます。

※公開講座の資料は、当日本校にて配布します。
※スイッチ制作に係る費用につきましては、当日受付にてお支払いください。
○申込方法 QRコードを読み取ってお申し込みください。
○申し込み締め切り 7月11日(金)

岡山県立岡山支援学校 〒703-8207 岡山市北区紙園666
TEL:086-275-1010 FAX:086-275-0029
E-mail:okasien@pref.okayama.jp 担当:ICT活用推進研究会(岡田、吉田)

③ 東京：訪問カレッジ@希林館

令和7年度 文部科学省委託事業 訪問カレッジ「学びの喜び」実践報告会 I
第8回 訪問カレッジ@希林館
文化フェスタ

日時 2025年9月23日(火祝日) 13:30～15:30(入場 13時～)
場所 白梅学園大学 J棟・文化創造ホール
定員 会場参加 50名 オンライン参加 50名
参加費 無料

「訪問カレッジ」は、特別支援学校などを卒業後、病氣や障害のために通所施設等の毎日の利用が難しい18歳以上の方のご自宅を学習支援員が訪問して、生涯学習を支援する活動です。
本文化フェスタは、学生自身の学びの成果の発表とともに音楽等の文化を楽しむイベントで、昨年度から白梅学園大学との共催になりました。ご参加のほど、よろしくお願い申し上げます。
飯野 順子(特定非営利活動法人地域ケアさばーと研究所理事長)

特定非営利活動法人地域ケアさばーと研究所
共催 白梅学園大学(森山研究室・午頭研究室・橋本研究室・仲本研究室 田中研究室)

会場案内 白梅学園大学内 文化創造ホール(東京都小平市小川町1丁目830)

文化創造ホール(Jホール)

・当日は上履きをご持参下さい。
・駐車場は大学の駐車スペースをお借りしますが、車いす利用者を優先しますので、会場へはできるだけ公共交通機関等をご利用ください。

参加対象
訪問カレッジ学生・ご家族、学習支援員、白梅学園大学ボランティア学生、訪問カレッジと学生の発表に興味のある医療・福祉・教育・行政等の関係者、その他

内容

<展示>・学習で使っている教材教具・学習で作成した作品
<学生の学びの発表・音楽鑑賞・交流>
13:30 文化フェスタ開始
13:35 学生の学びの発表①:歌の発表～皆で歌いましょう
13:40 訪問カレッジ学生のビデオ紹介(前半)
14:05 学生の学びの発表②クイズ対決!
14:15 訪問カレッジ学生のビデオ紹介(後半)
14:10 学生の学びの発表③好きな歌
14:30 カレッジ学生とボランティア学生とが共に楽しむ活動～演奏・イントロクイズ・歌
14:40 休憩 20分
15:00 白梅学園大学学生ボランティアのパフォーマンス&交流
15:10 みんなでバンド演奏や合奏を楽しむ
15:30 挨拶 白梅学園大学・地域ケアさばーと研究所

参加申込 下のURLから二次元コードからお申し込み下さい
(〆切9月20日)
<https://forms.gle/qeHbSMjWgESURDwm6>
問合せ先 NPO法人地域ケアさばーと研究所 担当 下川
ccsupport@com.home.ne.jp

④千葉：訪問カレッジ Enjoint ちば

文部科学省令和7年度「障害者の移行期の学びのモデル構築」委託事業
『重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援』に関する実践研究
訪問カレッジ「学びの実り」実践報告会 In ちば

「本音で語ろう！ 卒後の学びと生活」
～千葉県における訪問カレッジの可能性について考える～

日時：令和7年10月5日（日） 10:00～11:30
会場：特別養護老人ホーム淑徳共生苑 おゆみホール
千葉県中央区生実町2407-1

対象：障害のある方の生涯学習に関心のある支援者
（大学生、教員、療育機関関係、ご家族等）

申込み方法 右のQRコードから申し込んでください。

参加費 無料

講師
訪問カレッジEnjointちば利用者（保護者） 西岡 千賀子
訪問カレッジEnjointちば代表
（千葉県立袖ヶ浦特別支援学校教諭） 木川 純子

【日程】
10:00～ 趣旨説明 講師紹介
10:10～ 実践報告「訪問カレッジEnjointちば」の取組 木川 純子
10:30～ 話題提供「保護者が望む我が子の『卒業後』」 西岡 千賀子
10:50～ 意見交換「千葉県における訪問カレッジのこれから」
11:20～ まとめ

訪問カレッジとは
特別支援学校等を卒業された方の生涯学習を支援する訪問型の教育サービスです。

主催 重度障害者・生涯学習ネットワーク
問合せ先 訪問カレッジEnjointちば
Mail enjoint.chiba@gmail.com

⑥東京：訪問大学おおきなき

文部科学省 令和7年度「他分野連携による新たな障害者の生涯学習のモデル・ネットワーク構築」委託事業
『重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援』に関する実践研究

訪問カレッジ「学びの実り」実践報告会 In 東京

「学ぶことは生きること」
～障害の重い人にかかわる魅力と可能性を引き出すツール～

2025年11月30日（日） 9時30分～16時
東京都障害者福祉会館（JR田町駅下車徒歩5分、地下鉄三田駅徒歩1分）

参加費：無料（申し込みは右のフォームより受付中、当日の録画記録の一部を後日、アーカイブ配信することもあります。右のフォームより、お申込みください）

10時～訪問大学おおきなきの実践報告(1)

講義と実習：於保裕希さん
（神奈川県立茅ヶ崎支援学校教諭）
「障害の重い人の体に触れることでかわりを深める」
「体の動きをどのように受け止め、見立て、かわっていくか」

13時～訪問大学おおきなきの実践報告(2)

講義：佐野将大さん
（香川大学教育学部附属特別支援学校教諭）
「重い障害がある子どもたちの小さな発信を捉える視点」
「卒業後のコミュニケーションに活かす」
懇談：「障害の重い人の想いを知り、かわりを深める」

ataclab 講師：前香川県立東部支援学校の教諭、重慶市東部支援学校に20年間勤務。

主催：重度障害者・生涯学習ネットワーク
【重度障害者・生涯学習ネットワークについて】
特別支援学校などを卒業後、障害や病気のために通所施設等の毎日の利用が難しい18歳以上の方のご自宅等を学習支援員が訪問して生涯学習に取り組む団体により、平成29年12月25日に発足
（令和7年5月1日現在18団体）
問い合わせ先：NPO 法人訪問大学おおきなき
メール：taiju06wa01@b07.jitscom.net

⑤神奈川：Enjoy ばん祭

Enjoy Bonds AI
えんじょいぼん祭(さい)

～Bonds×Enjoyかながわ@DCU祭～

2025年
11月8日（土） 11月9日（日）
11:00～15:00 10:00～12:00

田園調布学園大学 2号館3階231教室
（川崎市麻生区東百合丘3-4-1）

※この事業は、文部科学省 令和7年度「障害者の移行期の学びのモデル構築」委託事業『重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援』に関する実践研究による「学びの実り」として実施します

入場無料

大学祭体験ツアー
大学生コンシェルジュが大学内をご案内します
※事前申込10/30(木)まで

展示・体験コーナー
大学生やカレッジ支援員による展示や体験のコーナーです

ステージ
アート体験、ダンス体験、音楽体験のステージです

BondsとEnjoyかながわのコラボ企画が実現しました！
このEnjoy Bonds AIはDCU祭に訪問カレッジ生が参加して大学祭を楽しむイベントです。
訪問カレッジ生はもちろん、どなたでもご参加いただけます。ぜひ一緒に楽しい時間を過ごしましょう！

参加申込フォーム
※大学祭体験ツアー申込みはこちら
※オンライン参加申込みはこちら

主催 田園調布学園大学ボランティアサークルBonds
共催 訪問カレッジEnjoyかながわ
（NPO法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会）
https://kenshikyoku.jp/visiting/ 電話：045(311)8742【平日10:00～16:00】

タイムスケジュール

8日（土） 11:00～15:00		9日（日） 10:00～12:00	
11:00	オープニング ・部長・理事長挨拶 ・オープニング音楽 ・各コーナー紹介 ・オープニング終わりのうた	10:00	オープニング ・部長・理事長挨拶 ・オープニング音楽 ・各コーナー紹介 ・オープニング終わりのうた
11:15	アート体験 ～作って遊ぼう～	10:15	訪問カレッジの紹介 ～活動を動画で見よう～
11:50	訪問カレッジの紹介 ～活動を動画で見よう～	10:30	ダンス体験 ～一緒にダンスを楽しもう～
13:00	おんがく体験 ～一緒に音楽を楽しもう～	11:00	アート体験 ～何ができるかお楽しみ～
13:40	アート体験 ～作って遊ぼう～	11:20	おんがく体験 ～音楽でつながろう～
14:30	おんがく体験 ～1日目フィナーレ &明日もね～	11:40	フィナーレ ・感想発表 ・新井教授挨拶 ・フィナーレみんなで歌おう
15:00	終了	12:00	終了

大学祭体験ツアー（※要事前申込）
大学生コンシェルジュが大学内をご案内します。
大学の中を学生と一緒にまわれる貴重な機会をぜひ体験してくださいね。
※ツアー参加希望者は10月30日（木）までに申込フォームにてお申込みください

展示・体験コーナー
ICT支援機器体験 Bonds学生企画ゲーム パーチャル花火体験
BondsとEnjoyかながわの関わり Enjoyかながわ活動紹介

ステージ企画出演者
Link heart（神奈川県大和市の多機能型事業所職員によるアート体験）
あっとういる（かながわバラスポーツ協会の派遣講師によるダンス体験）
バイナツブルプリンセス（カレッジ支援員が本イベントのために結成した音楽ユニット）

2) 実践報告会 I の記録

①神奈川：訪問カレッジ Enjoy かながわ (NPO 法人フュージョンかながわ・県肢体不自由児協会)

・日時：2025 年 7 月 12 日 (土)

・場所：神奈川県社会福祉センター

アンケートまとめ (実施日：7 月 12 日 (土) 参加者：21 名 アンケート回答数：15 名)

○実践報告について

<満足度> とても参考になった：12 人、参考になった：3 人

<感想>

- ・このような実践がある事の大切さ、素晴らしさを知ることができました。
- ・多くの実践の様子と、ご本人・支援の方々楽しそうな様子をうかがえて嬉しく思いました。
- ・訪問カレッジかながわの活動を知ることができて良かったです。
- ・卒業後の方の様子や、一緒に関わる中での喜びが伝わってきて頑張る勇気をもらいました (今、小学部のお子さんを担任しています)
- ・学校卒業後、社会とつながる力、ニーズがあっても外へ出ることが難しい方にとって訪問カレッジで学習や好きなことを継続できることは貴重と考えています。今後もよろしくお願いいたします。
- ・訪問カレッジという取組を知らなかったの、卒後というところで参考になった。
- ・手厚いサポートで、なかなかできないミシンや音楽など、楽しみ、学ぶ機会をつくれるのは素晴らしいなと思いました。サポートしてる方もとても楽しそうなのが印象的でした。
- ・合奏をしたり服を作ったり学びにつながる様々な活動を行っていることを知り、ぜひ参加したいと思いました。
- ・とても気になっていたの、内容が知れて良かったです。
- ・学ぶ機会があることの大切さを学びました。
- ・やや抽象的な内容でできれば事例にそった具体的なお話があればわかりやすくなったのでは？
- ・全編を通して現役の現場の教職員に見て聞いて欲しい内容だった。障害のある人たちとの向き合い方を再確認してほしい。
- ・学校卒業後の進路 (在宅) の様子を見るのが初めてだったので、勉強になりました。

○講演「教材・教具を通して障害の重い人にかかわる魅力」(松本先生)について

<満足度> とても参考になった：15 人

<感想>

- ・具体的な教材・教具の使い方を知るだけでなく、障がいの重い人の可能性を信じ関わる支援の基本姿勢を振りかえさせていただく機会ともなりました。
- ・教材・教具の工夫とともに、それを介した人と人との関わり方、コミュニケーションの大切なポイントもおしえていただきました。ありがとうございました。教材・教具のつくりの丁寧さに、松本先生の優しさを感じます。
- ・一つひとつの内容が日々を振り返り改めて考え直すきっかけになりました。ありがとうございました。
- ・教材づくりは教員の軸だと思っています。でも、教材ありきになっていないか、担任するお子さんの実態をしっかりと読み取れているのか、いつも悩んでいます。今日、先生のお話を伺って、できること、の前に、何に困っているかを探ること、アセスにとらわれないこと、外と自己のやりとりで新しいことを知る。本当に大切なことを言語化して伺えたこと、大きな学びになりました。
- ・「分ること」と「できること」をできる限り近づけていきたいと改めて思いました。
- ・同じ肢体の教員としてとても参考になる内容であった。高等部しかない学校のため、3 年という中で何ができるのか、という点を考えながら教材・教具を作ったり選んでいきたい。
- ・盛り沢山ありがとうございました。OT のため、空間認知の部分、もう少し詳しく聞きたかったです。かなり

研ぎ澄まされた教材ですが、要素をおもちゃ選びなどの参考にしたいと思います。

- ・以前大学で松本先生のお話を聞かせていただいたのですが、今回はより障害のある方とどう関わるか、教材をどう活かすかなど勉強になりました。
- ・専門的な内容で学ぶこと、その過程の大切さやアプローチ方法がわかりました。
- ・しっかりと、相手を人としてとらえる大切さを学びました。
- ・教材がとても工夫されていてすばらしいです。
- ・ICT 救助隊の活動もよくわかりました。
- ・学び合うというお話に共感しました。
- ・教材作成について悩んでいたのもとても参考になりました。本日、学んだ内容を今後の個別学習に生かしていきたいです。

○講演「障害の重い人のスイッチの適合」(ICT 救助隊)について

<満足度> とても参考になった:14人、無回答:1人

<感想>

- ・ICT の可能性を改めて教えていただきました。
- ・学校(職場)にもあるスイッチも、本日、紹介していただいた使い方や、1 人ひとりにあう補助具によって活用の仕方がさらに応用できることを学びました。特に PPS スイッチについて、導入を教えていきたいと思いました。ありがとうございました。
- ・様々なスイッチの工夫の仕方を知ることができて良かったです。
- ・沢山のスイッチを体験しながら、実践例を丁寧に伺えてイメージが具体的に持てました。HP 見ます!!ありがとうございました。
- ・一人一人の人にとって適したツールを用意することの大切さを学びました。現場に生かしたい。
- ・少しの力でおせるスイッチというものが欲しいのにアイデアがない、身近にないという状況だったので、まさに今日の研修で知りたいことがたくさん知れてよかった。
- ・ずっと聞きたかったので詳しく体験含めお聞きできてよかったです。どんどんお力を借りたいと思います。
- ・スイッチについて種類や活用方法など基本的なことから丁寧に教えてくださり、とても勉強になりました。
- ・実践で活用したい内容で、とても勉強になりました。
- ・具体的でとても学びになりました。
- ・実際にいろいろなスイッチを触らせていただき、参考になりました。
- ・ピエゾスイッチに馴染みがなかったが、具体的に使い方を教えていただき参考になりました。
- ・このスイッチなら…と何人もの子どもの顔が浮かんた。スイッチや教材を通して障害のある人たちを世界へつなげる大事な視点。公立学校等の研修はこういう内容をやってほしい!!
- ・こんなにたくさんのスイッチがあるのか、と驚きました。今、対応している方に合うのはどれか、などとても興味深くお話を伺いました。
- ・個人の動きに応じたスイッチの活用について参考になりました。一人一人に合ったスイッチを探っていきたいです。

○その他全体の感想

- ・是非今後ともつながらせていただき、利用者さんの日々の支援に活かしていきたいと思います。
- ・貴重な学びの時間をご提供くださいましたことに感謝申し上げます。
- ・3 部構成で、どれも学びになりました。ありがとうございました。
- ・また参加したいです!
- ・とても参考になりました。
- ・このような機会を無料で開催、とても有難かったです(もっと混んで大変かと覚悟していましたが)。ぜひ、

もっと身近にスイッチ、教材を捉えて、積極的に利用（活用）していきたいです。OT、PT との合体講座もぜひ!!

- ・今回参加するにあたって経験のない大学生が講演に参加させていただいていいのか不安に感じていましたがとてもわかりやすく勉強になりました。貴重な機会ありがとうございました。
- ・参加できてよかったです。ありがとうございました。



②岡山：訪問カレッジ@きーぼ岡山

・日時：2025 年 8 月 4 日（月）

・場所：岡山県立岡山支援学校

◎岡山支援学校の学校公開講座の一部にいらしていただいたことで、大変たくさんの方に興味を持って聞いていただくことができたのが、とてもよかった。

午前：福島先生のオンライン講義＝教員のみが対象

午後：支援機器体験会 45 分、学びの実りⅠ 50 分、スイッチ製作 90 分＝教員・事業所職員・卒業生家族

- ・学校現場で「生涯学習」が課題となっているため、卒業後の暮らしについて知りたいというニーズがあり、今回の話は、卒業後の暮らしの一部として興味深く捉えられたと思われる。
- ・ICT 活用推進研究会が主導して会の運営を行っていたので、ICT 関連に興味のある人が多いかと思ったが、意外と「生涯学習」「卒業後のくらしぶり」への注目度が高かったように思える。
- ・「生涯学習」への取り組みに参加してみたい、広がってほしいという声もちらほらあり、理解を広げることができた。「生きることは学ぶこと」を写真や動画を通してみて頂けたと思う。
- ・事業所職員が教員と肩を並べて話を聞き、スイッチづくりをする研修会は非常にまれて、相互理解やスムーズな移行支援に向けてここがスタートである気がする。（進路係以外でも連携できる雰囲気になれば）

◎アンケート総数 49 枚

【学校関係】32 【福祉関係（相談支援・生活介護・その他）】12（1・6・2含む）【無記名】5

- ・卒業後のイメージがもてた。学校は人生のごく一部、人生のサポートが大切だと思った。
- ・ぜひ見学に行ってみたい。
- ・現在訪問教育を受けている生徒の中に、ニーズとして卒業後、通所（生活介護）は難しい。学校の延長のようなサービスがあればと言われていた。きーぼは以前から興味があり、今回話が聞けてよかった。
- ・国からの支援がもっと広がるとよいなと感じた。

- ・学校卒業後も、たくさんの人とつながれる、学び合える環境を、そして、必要な方に必要な情報が伝わる
といいなと思った。温かく寄り添う実践をありがとうございました。
- ・訪問から始まっても、地域社会との接点へということが印象的だった。
- ・お金も必要なことだとは思いますが、もっともっと広がればいいと思う。ボランティアを募ることでもっと知って
もらえると思うし、協力していきたいと思った。
- ・学校現場においても、思いは持つけど押しつけないを大切にしたいと思った。
- ・卒業後の暮らしについて気になっていたのも、知れてよかった。
- ・卒業後のことはどうしようもないことと、こんなものと思っていたが、「生きることは学ぶこと」本人の願い
をくみ上げた実践をされていることに感銘した。いろんな取り組みがあることを知ることができてよかつ
た。限られた範囲でしか使用できていなくて、ICT 活用がまだまだ足りていないことに気づかされた。
- ・キャリア教育として教えるのではなく、生涯学習として、ともにやりたいことをゆっくりでも学んでいけると
いいなあとと思った。
- ・卒業後にも継続して支援されていたり、新たな支援をされていたりしてすごいと思った。とても勉強にな
った。
- ・生涯学習の大切さを改めて感じた。卒業後の生徒に向き合うすてきな活動に心打たれた。
- ・卒業後も自分で何かをする、できる、楽しさの場があることは、QOL の向上につながると思った。楽しそ
うな笑顔が印象的だった。
- ・ひとりひとりのやりたいことに寄り添った活動がとても素敵だった。学校だと、どうしても、「できた」という
ことを評価として求めてしまいたくなるので、「支援者が提案するが、決めるのは本人」そのとおりだと
思い、心にささる話だった。
- ・「訪問カレッジ@きーぼ岡山」の活動が少しわかったような気がする。とても大切な取り組みをされてい
ると思った。
- ・成人してからでも、たくさん楽しいことができるなど改めて感じた。そのような楽しさを子どものころから
味わえる教育をしたい。
- ・高等部卒業後の生活の在り方について大変考えさせられた。
- ・ノウハウが蓄積するようなことがあれば…。具体的に知りたいと思った。
- ・様々な取り組み・学習が、卒後ストップしてしまう、卒業したくないという保護者の声を聞く。少しずつこ
うした事業が広がること、広く知ってもらうことが大切だと思った。
- ・学校での子どもたちへの取り組みも、卒業後につなげられるようにしていきたいと思った。
- ・いろいろな場で、生涯学習について考え、深めていくことが大切だと改めて感じた。
- ・利用者様が喜びを感じられている様子が見られて感動した。
- ・卒業後を知る、よい機会だった。きーぼ岡山のような実践をしてくださる団体がふえるといいなと、教師と
して感じている。
- ・日々の支援の中で生かせるところに積極的にスイッチ等を取り入れていきたいと思う。
- ・まだ定型の方法がない中で手探りながらやってみる姿勢を見習っていきたい。
- ・ICT は自分が苦手な分野で取り掛かりにくく感じるが、少しでも活用し利用者様のやりたいによりそつ
た支援がしていきたい。
- ・実践の話聞くことができ、わかりやすかった。
- ・ひとりひとりにあったことを考えたりすごいと思った。
- ・卒後の生活のギャップを埋めていかないと考えた。
- ・ICT の活かし方、今後の参考にしていきたい。
- ・本人の可能性を見つけること、それは遊びや楽しみの中から見いだせると思った。
- ・とても勉強になった。自分ももっと知っていきたいと思った。

- ・卒後在学中の経験を途切れることなく経験させようとする強く熱い思いがすばらしいと思った。
- ・実践の様子、利用している方の様子が、写真と動画で見ることができよかった。利用者の方の表情がよかった。自分で選ぶこと、すてきだなと思った。
- ・とてもたくさんの情報をいただきました。医療的ケア対象の方、特に呼吸器対象の方の将来に向けて安心して有意義に人生を送っていける選択肢の一つとしてさらに発展していただければと思っている。
- ・知らない言葉も多く、とても参考になった。

③東京：訪問カレッジ@希林館（NPO 法人地域ケアさぽーと研究所）

・日時：2025 年 9 月 23 日（火・祝）午後 ・場所：白梅学園大学

アンケート回答 20（内訳 訪問カレッジ学生・ご家族等 3 訪問カレッジ学習支援員 9 教育関係者 3

福祉関係者 1 訪問カレッジに興味のある障害者家族等 4）

- ・本人もとても楽しんでいました。ボランティアの学生さんたちや先生方と関わって喜んでいました。
- ・現在高校生の子供の卒業後に…と考えておられます。皆さんがいろいろな方法で活動をされていて、素晴らしいです。年に一度発表の場があるのも、とても良いですね。
- ・今回初めての参加でしたが、たくさんの方と交流できて貴重な体験でした。特に白梅の学生さんのような若い方が障害者に真摯に向き合って接している姿は、福祉の将来を明るく照らしているようで、とても感銘を受けました。本当にありがとうございました。
- ・訪問カレッジの取り組みを具体的に知ることができ、とても勉強になりました。
- ・みなさん表情豊かで、得意なことたくさんあり、楽しそうでした。
- ・演奏会もあり、たくさんの人たちが参加されていて賑やかな雰囲気が良かったです。
- ・初めて参加しました。学生さんがついてとなりにすわってくださり、すごく学生の学習の様子など知ることができて良かったです。
- ・オムツ替えの場所、台の高さ、広さ、使いやすく、ありがたかったです。
- ・訪問カレッジの学生さんの多岐にわたる学習。年間を通しての学習の成果を発表出来る場があるという事、とても羨ましく思いました。娘についた白梅学園の学生さんもとても感じが良かったです。障害の無い同世代の人と接する機会が殆ど無いので、このような交流の場も貴重です。ありがとうございました。
- ・年々、良い形になってきて素晴らしいと思います。今年は会場に来られた学生さんも多く、学生同士の交流の場面が見られたのが良かったです。学生の学びの発表も、初めて前に出て披露した方もいて、学びの様子がよくわかりました。見ている方も楽しく過ごし、あっという間の時間でした。支援員の先生方、事前準備から当日まで、本当にお疲れ様でした。
- ・学生さんらの、去年の劇も良かったです。今回のスライムは、カレッジ生も共に活動ができて、とてもアイデアバッチリでした！
- ・支援員の皆さんも学生さんも、何事も快よく動いていて、流石白梅学園大学の学生さん！と、仲本先生がおっしゃる通り、明るく気持ちの良い学生さん達のおかげで、文化祭も滞りなく楽しく終えられたと感じます。
- ・会場にたくさんの方が集まったことにまず驚きました。日々それぞれが好きなことを楽しんだり学ぶ姿が素敵で、その成果を大勢の前で発表する場所があるのは良い経験だなとおもいました。いくつになっても一緒に楽しく学べる仲間がいるのは羨ましいです。そんな先輩たちにわが家も続けたいとおもいます！
- ・現在他校には小3から専用通学車両で登校。小6ぐらいから看護師配置も整い毎日親無しで通える様になってかなり自信もつき自分の世界としての学校生活と放課後デイ週3ー4生活を送っています。自

己主張も強い子供なので今まで週3以上17時30～18時前に帰宅していたのに、卒業後の生活介護帰宅後に時間を持て余さないか、週何回通えるのか、通えない場合に自分の部屋もない自宅で過ごす環境整備も金銭的に難しく、自宅で子供と同じ空間にずっと居ると、自閉症気味でもある我が子に付き合い自分が手をあげそうになるのではないかと、自制していますが未来の自分が怖いのが本音です。今回、訪問カレッジには通所が難しい方を対象にしているので我が家は対象者とはならないかもしれませんが、実際の皆さんの活動を見たく参加させていただきました。

- ・21名のお子さんら一人一人の長所を活かした活動を提供している実態を、本人らの発表を生で見る事ができてとても元気をもらいました。そして家庭学習に取り入れることができると良いな、という活動も勉強になりました。実際親による家庭学習をするには、時間を決めないと家事でズルズルしてしまいきないことばかりで理想論で終わってしまうことが多いのが自身の経験上での実態ですが、自宅に入っている看護ステーションさんら支援者とも共有して学習として取り入れたいと思いました。
- ・この日を目標に、1年間学習に取り組んできました。時間をかけて制作した作品を展示する事ができたこと、染め紙カードを配布できたこと、何よりカレッジ生として元気に文化フェスタに参加できたことがとても嬉しかったです。達成感溢れる笑顔をいっぱい見せてくれました。息子にとって、この特別な日が次の目標に向けてのモチベーションになったのではと感じています。白梅学園大学の先生方、学生の皆様楽しい時間をありがとうございました。



④千葉：訪問カレッジ Enjoint ちば

・日時：2025年10月5日（日）

・場所：特別養護老人ホーム淑徳共生

25名程の参加でしたが、保護者の方の参加が多くありがたかったです。

参加者一人ずつから発言をいただきましたが、「卒業後の学び」についてのニーズの高さを感じました。参加して下さった皆様方からの期待の声も多く、自分達のやろうとしていることへの確信と、前に進む勇気をいただくことができた貴重な場となりました。今後はどう周知し、スタッフを確保していくかが課題となりますが、地道に進めていこうと思います。

「本音で語ろう！卒業後の学びと生活」

～千葉県における訪問カレッジの可能性について考える～ アンケート集計結果

2025年10月5日（日）10:00～11:00 おゆみのホールにて開催

参加者25名（当事者・家族 名 17名 学校関係者 名 5名 その他 名 3名）

回収数 18 ← 所属区分は不明（感想記述欄は語尾簡略化、順不同）

○趣旨説明「訪問カレッジ Enjoint ちば」（西山 博さん）について

とても参考になった：15 参考になった：3 少し参考になった：0 参考にならなかった：0

<感想>

- ・大学で場所（行事）、学生等の取組があるのは、とても良いことだと思う。
- ・とても優しい語りで、緊張することなく参加できた
- ・先生方が卒業後の子どもたちのことを真剣に考えてくださっていることを知ってありがたかった。
- ・社会とのつながり、若者（同世代）とのかかわり、お互いプラスになっていくこと そういうことに興味がある。楽しみにしている。
- ・いつも寄り添ってくださる西山先生の存在は大きい。
- ・はじめは訪問カレッジで学んでいる内容を詳しく知りたかったが、「その人、その家庭に合わせた目標に向かう」ということだと理解した
- ・ともに豊かに学べる人生を歩めたらいいなと思った。3
- ・設立にあたって「共に学ぶ」ということを大切にしていることを知り、うれしく思った。
- ・参加者の自己紹介がとても参考になった。
- ・小学生のため卒後は全く現実的に考えていなかったが、とても勉強することができてよかった。
- ・大学とのコラボはいい案だと思われるが、授業者にとっては学生にも説明をしなければならず、1年間かかると思う。
- ・つけた力を学ぶという意味では、コミュニケーション能力を発揮する場を作ることが中心でもいいのではないと思う。

○実践報告「訪問カレッジ Enjoint ちば」の取組（木川純子さん）について

とても参考になった：14 参考になった：4 少し参考になった：0 参考にならなかった：0

<感想>

- ・とてもよい取組だと思う
- ・数年後が楽しみ
- ・木川先生の熱い気持ちが伝わった
- ・たくさん子ども達に必要な場だと思うので、是非前に進めていってほしい。
- ・卒業後の進路の選択としてあるのはありがたい。
- ・卒業後のんびり過ごすだけでは嫌だなと思っていたので、学び続けたい。
- ・学ぶこと 勉強だけではない。
- ・学びの場 発表会などとてもいいなと思う。
- ・千葉で始まるのを待っていた。
- ・協力はおしまない
- ・Enjoint 素晴らしいネーミング。意味がわかってすっきりした。
- ・ありがたい、本当にうれしい 子どもの未来に明るい希望がもてた。
- ・文化祭 お手伝いしたい。制作、展示などお役に立てると思う（うみのもりこまちださん）
- ・保護者として子どもの環境をよくするためにやりたいことはたくさん思いつくが、実現するのは難しい。実現してくださるありがたい。
- ・ここに至るまでの大変な道のりがわかった。
- ・親として子の学びってなんだろう、親が決めた進路で進めてきてしまったのか？
- ・卒業後、社会とつながりながら学んでいけることの大切さがあると思った。
- ・力を合わせてがんばろう。

- ・どういった考えでここまで来たかを理解でき、成り立ちの思いがわかりとてもよかった。
- ・医療的ケアが必要な障害児者のために動かれていることを知り、ありがたいと思った。
- ・訪問カレッジを作ろうという気持ちがとてもうれしい。卒後の選択肢の一つになることが当たり前の将来になってほしいと思った。
- ・学んだことを発表する機会があるなんて、親としてうれしい。
- ・家の中など狭い世界にいたことが多くなると思っていたので、大人になってもいろんな方とかかわってほしい、世界を少しでも広げてあげたい。卒業するのが怖いではなく少し楽しみに変わった。
- ・立ち上げの意義はわかるが、学校でやっていたことをそのまま持ち込むのには無理があるのではない。教材、環境等はどうするのか、等決めなければならないことがたくさんあると思う。

○話題提供「保護者が望む我が子の『卒業後』」（西岡千賀子さん）について

とても参考になった：13 参考になった：4 少し参考になった：0 参考にならなかった：0 記載なし：1
 <感想>

- ・毎日通所に行かせたいと思っていなかったのも、そしてあまり詰め込みすぎると本人も親もつかれてしまうので、平日家に来てもらうのはとても良いと思う
- ・西岡さんのお気持ちがよく伝わった
- ・基本は個別での場になるが、時に集まって子どもも親も共有できる事があるとよいと思った。
- ・目標をたてて達成していくこと 達成感は保護者も本人もいいこと
- ・学校訪問籍のお子さんの話を聞けてよかった。やはり社会との関わりが大事だったといろいろ考えさせられた
- ・いつまでも我が子の成長をみていきたい。卒後も子ども達のキラキラした目を見ていたい、それによって家族の喜びにもつながる、ありがたいこと。
- ・これから始まるんだな、と感じられた。
- ・お子さんをみているだけでも精一杯の中、楽しみとか周囲の人と考えている姿にぐっと来た。
- ・学校では訪問だったが卒業後は施設に通う意味を確認し納得した上で通所を選択し、今の充実した生活につながっているのだと知り、とても参考になった。
- ・同じ保護者としてとてもうなずけて参考になった。
- ・助けてくれる人がいる、頼れる甘えられる人がいるということはとても力になる。
- ・保護者の思いはよくわかる。同じような思いをもたれていると思う。学校での授業がよかったと思われることはありがたいことだと思う。

○意見交換 その他全体の感想（ご自由にお書きください）

<感想>

- ・今後もよろしくお願いしたい
- ・参加した皆さんの気持ちが聞けて良かった。
- ・お手伝いがあれば、一緒にやれたらいいなと思う。2
- ・子どもが達成感をもって帰ってきた時の顔が見たいという気持ちに共感した。そういう体験をさせてあげたいと思った。
- ・より多くの方々に周知してもらえたらうれしい。
- ・訪問でも施設でも学びを。
- ・なんとなく興味があって参加してみようと思ったが、すべてが学習ということを感じることができ、参加して本当によかった。
- ・温かい熱い思いに感謝したい。学校生活で子どもがたくさん成長している姿を見ていて、これが18歳で

終わってしまう…絶望に近いものを感じている。大きな希望をもらえ、とてもうれしい。

- ・生涯学習には 人生を豊かにする芸術文化の存在がある。生きている形を残す文化芸術の役割をより実感し行動する機会を作らねばと思った(うみのもりさん)
- ・未来が明るくなる話だった。
- ・その人のニーズにあう、その人のよさをいかしてQOLを下げずに豊かに生きる を目標にしたい。
- ・訪問カレッジの意義、必要性がとても感じられた時間だった。2
- ・いろいろな立場からの話を聞くことができ、とても刺激になった。先生方先輩方の行動力に感動した。
- ・卒業後は生活に追われ、学校で学んだ学習が止まってしまうが、訪問カレッジという形で関わってもらうことで人生ずっと楽しく学んでいける時間がもてると思った。
- ・学習について改めて考えることのきっかけとなった。
- ・支援と学びの違いはなんだろう、と思った。深いテーマ。
- ・社会とつながることは人にとってとても大切。
- ・いろいろな情報を得られてとても参考になった。今後は存在を広く知ってもらうことが必要だと思った。
- ・支援者の負担にならないような形にして実現し、広がってほしい。
- ・これからのことを勉強できる機会になった。
- ・子どもの人生が豊かになることはとても大切だと再認識した。
- ・退職者としての消極的な意見で申し訳ないが、退職しても元気な方は再任用、それ以降は高齢者になってきて身体介護や医療的ケアが難しくなってくると思う。責任もあることなので、気軽に引き受けられないというのが個人的な考え。身分的な扱いも気になる。

⑤神奈川：訪問カレッジ Enjoy かながわ(NPO 法人フュージョンかながわ・県肢体不自由児協会)

- ・日時：2025 年 11 月 8 日(土)9 日(日) EnjoyBondsAI(エンジョイぼん祭)
- ・場所：田園調布学園大学：延べ参加者91名

- ・訪問カレッジ Enjoy かながわ単独の文化祭は、立ち上げ時から、田園調布学園大学で開催したいと考えており、大学の協力を得て、初めてかながわ単独で文化祭を開催することができた。
- ・訪問カレッジ Enjoy かながわの同行訪問を継続して行うために大学生が立ち上げた田園調布学園大学のボランティアサークル Bonds と共催で、大学祭を活用して開催することができた。
- ・大学生と事前会議(2 回予定：実施 1 回)を行ったが、打ち合わせとしては足りなかった。
- ・事前会議の中で大学に駐車場がないこと、エレベーターが狭くストレッチャー型の車椅子の方がエレベーターに乗れないこと等、カレッジ生が来学する際の課題が明らかになり、対応を考える必要があった。
- ・大学の文化祭を活用するので、大学生がコンシェルジュとなり大学祭体験ツアーを企画した。
- ・他の企画は、なるべく他団体の協力を得て、アート(リンクハート)・ダンス(県スポーツセンター)・音楽(学習支援員有志)準備することにした。どの団体からも快諾いただき、県スポーツセンターの講師派遣事業を利用させてもらった。
- ・展示等の準備は極力軽減し、配信等で大学祭の雰囲気のカレッジ生に味わってもらいたいと考えた。
- ・お天気に恵まれず客足は2日間で91名だったが、カレッジ生と大学生の新しい出会いも生まれ、文化祭を楽しむことができた。大学の大学祭参加人数は昨年比100名増だったとのことで、私たちの Enjoy ぼん祭の開催が、参加人増の一因にもなったと考えられるとのことで、嬉しく思った。

○当日の様子



大学祭体験ツアー中



Bonds 学生企画ゲーム



1 日目フィナーレ



2 日目フィナーレ



Link heart (多機能型事業所職員によるアート体験)

エレベーターが狭く、3階の会場には入れないカレッジ生への工夫



演奏者が1階に移動し演奏



オンラインで会場の様子を見る

○参加後の感想

<来校できたカレッジ生の感想>

- ・初めて、大学にきました。音楽、ダンス、アートどれも楽しかったです。同世代の大学生と関わることができ、本人はとても喜んでいました。小学校、中学校と居住地交流を体験したが、お客さま感が拭えなかったが、今回は本人の表情から、直に触れ合い楽しかったのが良くわかる。
- ・ずっと大学には興味があった。チアダンスの華やかさが大学祭らしくて、楽しかった。色々な大学に行みたい。

<オンラインで参加したカレッジ生の声>

・ずっと流して見ていた。音楽あり、ダンスあり、アートありで楽しかった。本人は、今度は大学に行く事を目標にしています。

<大学生の感想>

- ・カレッジ生の皆さんと、大学で交流できてとても楽しかったです。カレッジ生も楽しそうな表情が見られ、やりがいを感じました。
- ・運営面では反省があります。来年大学で同じように開催するのであれば、文化祭の集まりなどは3年生が出たほうが良いと思います。4年生は実習があって大変だと思うので。事前に、音量について話がないと代表の方が怒られてしまうので、小さなことでも連絡が取りあえるといいなと思いました。3・4年生が出し物を用意していたと思うので、もう少し活用しても良かったのかなと思います。

<当日ボランティアの声>

- ・音楽・アート・ダンスと文化祭らしい内容で面白かった。当日初めてきたボランティアでもお役に立てて、嬉しかった。

<県スポーツセンターから派遣頂いたダンス講師>

- ・自宅等での訪問では難しい多くの人数での、音楽、アート、ダンス、プラネタリウムなどの様々な学びを、カレッジ生、保護者、支援者、全ての人が楽しめた温かい素晴らしい時間でした。
- ・学園祭での開催と言うことで、現場に参加できたカレッジ生は同世代の方々と交流でき、今後もこういう機会が増えるといいと思います。そして、オンラインの精度（画像や音源など）が更にあがることを期待します。

<オンライン参加の支援員>

- ・オンラインの参加であっても、現地にいるかのような体験ができました。特に、大学内を大学生と共にカレッジ生が巡回する映像は、大学祭の雰囲気伝わってきました。訪問カレッジのカレッジ生のオンライン参加少なかったのが残念でした。カレッジ生が家庭からオンラインでの参加を気軽に可能になるような取り組みが必要かと思いました。

⑥東京：訪問大学おおきなき

・日時：2025年11月30日（日）

・場所：東京都障害者福祉会館（延べ参加者85名 現地30名・アーカイブ配信55名）

<学ぶことは生きることー障害の重い人にかかわる魅力と可能性を引き出すツール>

○講義と演習：於保裕希さん（神奈川県立茅ヶ崎支援学校）

「障害の重い人の体に触れることでかわりを深める

～ともにある支援-触れることから始まる関係性～

障害のある人とかかわることの意味や魅力を伝え、かわる人（支援者）を増やし、今後の障害の重い人の生涯学習を社会に定着させていきたいという想いで取り組んでいます。

お二人とも3人の事例をもとに話してくださいましたが、まさにその瞬間から変わっていきたくていうずうずうしている自分を感じることができました。今回のお二人の話は、「できない」ことを「できる」ようにするような関係ではなく、もっと根源的な、触れ合い、深まってくかわりに迫ろうとしていました。

於保さんから学んだことの一つは「かわり方（触れ方）を変えないことで子どもの変化に気づく」ことでした。佐野さんから学んだことの一つは自分の目や耳だけに頼るのではなく、記録の中から大切なサイン（動き）を見つけることでした。訪問大学おおきなきからも相澤と鈴木からささやかな報告をさせていただきました。報告会終了後いただいた感想を掲載させていただきます。（相澤）

【講師の振り返り】



今回の研修では、皆さんから「一貫性と継続の価値」「解釈を急がず応答に寄り添う姿勢」「活動の意味を広げる」という大切な視点が挙がりました。

「いつも同じ動きや関わりを意識し、子どもの小さな発信に気づけるように」「理由を決めつけない」「変化を起こすために変化を起こさない」という言葉から、安心できる予測可能な環境が信頼を育むことを、皆さんと一緒に考えられたことをうれしく思います。

また、「活動とは必ずしも動くことではなく、存在を感じる、時間を共有することも活動」という新しい発見や、原始反射の体験を通して理解が深まったという声もあり、理論と実践を結びつける時間になったことを感じています。

今回の学びは、私にとっても大きな気づきの連続でした。支援の本質は「できること」よりも「ともにあること」であり、非言語的なかわりや安心感の形成が学びや発達の土台になるという視点を、皆さんと共に深められたことに心から感謝しています。

さらに、アンケートからは「成人期の支援に学校での積み重ねをどう生かすか」「生活介護などの現場との連携を強化したい」という声も寄せられました。学校で培った理解や方法が成人期にもつながるよう、今後も橋渡しの視点を共有しながら深めていければと思います。

一瞬一瞬、1日1日の積み重ねが、子どもたちの安心と信頼を育むことを、これからも皆さんと一緒に大切にしていければと思います。ご参加、本当にありがとうございました。

（於保裕希さんより）

【感想から】今回のお話は、さまざまな理論が交えてあり、とても分かりやすく理解が深まりました。支援の方法について、場面に応じて変える部分と変えない部分と、一貫性を持たせることで、子どもの気持ちの変化に支援者が気づきやすくなるという点が、印象に残りました。（中略）原始反射のお話も大変興味深かったです。脳性麻痺のある25歳の息子は、時々驚いたような表情とともにモロー反射に似た動きを見せることがあります。今回、実際に原始反射を体験させていただいたことで、息子がどのような感覚を持っているのか少し理解できた気がしますし、反応を軽減するヒントも得られました。

○講義と懇談：佐野将大さん（香川大学教育学部附属特別支援学校）

「重い障害のある子どもたちの小さな発信を捉える視点を卒業後のコミュニケーションに活かす」

【講師の振り返り】



この度は、訪問カレッジ「学びの実り」実践報告会に参加させていただき、本当にありがとうございました。

学校を卒業されてからも、教育の視点を大切にしたい、成人ならではの取り組みを模索されている姿を間近で感じさせていただいたことは、私のこれからの励みとなっていくと思います。参加されていた先生や保護者の方々の熱心で優しい表情が、とても印象的でした。

私の実践は、上手く整理できていなかったり、ポイントが絞られていなかったりする面も多くあると思います。また、その時は「こうかな？」と想着いても、年月が経てば、「あれ、この時の解釈は間違っていたかな」と思うことも多いのが私の実践です。それでも今回、その恥ずかしい実践をゆっくり紹介させていただきたいと思ったのは、実践に対する思いや気持ちを、そのまま正直にご報告することが私にできることかな、と思ったからです。

ほとんどの子どもは、こちらが何も働きかけなくても、身体を動かしています。本当に微細であっても、どこかが動いていることが多いです。私たちの現場では、わずかな動きに「どんな意味があるのだろう」を模索しています。でも、その視点では悩みがつかないことも経験しているのです。だからこそ、目の前の子どもの動きの中に、「重要な表現は必ず含まれている」と信じ、他の動きのなかからかき分けるように探していく実践、が重要なのではないかな、と今は考えています。いくつかの意味の異なる動きが重なって生じているのかもしれない。階層が異なる動きが混在しているのかもしれない。そのなかに、わずかかもしれないけれど、大切にしたいと思える動きを探していく。そのような取り組みは、やっていてとても手ごたえを感じるのです。

今回の報告は、「初めまして」のつもりで行いました。今後ともじっくりでも、何度でも、たくさん話を一緒にしながら、実践を深めていける仲間として加えていただければ幸いに思います。(佐野将大さんより)

【感想から】タイムプラスや動画を用いた記録は、すぐにでも取り組みたいと思いました。また、各児童に合わせた挨拶の方法を考えることは、「誰でもその子と関われる」きっかけになり、児童の世界を広げられると思ったので実践したいです。

○訪問大学おおきなき実践報告(1)(2)(講師:相澤・寺本・木下・熊谷、鈴木麻依)

- (1) 発信がなかなか見つからないとき、心拍もその方を知る手がかりになります。佐野さんの研究を参考に Y さんの心拍を 15 秒ごとに記録し、グラフやヒストグラムにして考察してみました。(相澤)
- (2) お母様の「鳴らしていいんだよ」の声かけや、それを発展させた私の歌いかけに応じて H さんがツリーチャイムを鳴らす実際の場面をお見せしました。H さんが鳴らす度に会場の皆様から「お〜!」と温かい声が上がりました。「生きることは関係を生きること」という視点に立ち、相互交流を大切にしていきたいとお話しさせていただきました。(鈴木)

【感想から】

- ・ご本人がチャイムを演奏するまで、きめ細やかなやりとりやご本人の様子を注意深く見ての対応があり、まさにご本人に寄り添った実践だと思いました。(以下略)

【アーカイブ配信の感想から】

- ・配信観させていただきました、お二人の子どもに向き合う真摯な姿勢に感銘を受けました。於保裕希さんのお話は、基本的なところを押さえてまとめてもらえていて、とてもよかった
ですし、佐野将大さんのお話は子どもたちからのメッセージに真っ直ぐ向き合っている実践
ですごいなあと思いました。職場の若い先生とも是非とも一緒に観たいと思いました。そんなライブラリーのような学びの場があることで、発信の小さい子どもたち理解が広がりそうで、とてもよかったです。ありがとうございました。(和歌山さくら支援学校教員)

(3) 実践報告会Ⅱ 第4回 訪問カレッジ「学びの実り文化祭」

・日時：10月25日(土) ・場所：オリンピック記念青少年センター

I 実施概要

1 期日 令和7年10月25日(土) 10時～16時30分

2 会場 国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟4階 416研修室

3 主催 重度障害者・生涯学習ネットワーク ※文部科学省委託事業

4 後援 東京都教育委員会 東京都社会福祉協議会 東京都重症心身障害児(者)を守る会
全国肢体不自由特別支援学校 PTA 連合会 東京都肢体不自由児者父母の会連合会

5 対象 どなたでも参加できます(障害児者・家族、学校・生活介護等の職員、相談支援専門員、医療的ケア児等コーディネーター、医療関係者、行政等)

6 参加費 無料

7 目的

(1) 国の障害者の生涯学習に関する施策の理解・啓発を推進する。

(2) 学校卒業後の学びの機会と場の実際について周知し、その意義について理解を広める。

(3) 学校卒業後の訪問型生涯学習の制度創設に向けた発信を行う。

8 内容

(1) 受付・フォトスポット(416研修室入口)

(2) 開会式 午前 10:00～11:00 ※オンライン Zoom 配信

全体司会 新井 雅明(田園調布学園大学教授)

①オープニングビデオ:ネットワーク会員団体の学生の学びの様子のダイジェスト

②挨拶 飯野順子(重度障害者・生涯学習ネットワーク会長)

③行政説明 午前 10:10～11:00

「障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について」

・別田果菜子(文部科学省 総合教育政策局 障害者学習支援推進室 専門職)

「障害福祉施策の動向について」

・富澤 元嘉(厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 障害サービス係長)

(3) 基調講演 午前 11:00～11:50 ※オンライン Zoom 配信

演題 「障害のある方の生涯学習のこれから ～ひろめる・深めるために～」

講師 井口 啓太郎(国立市教育委員会教育部公民館館長補佐)

・文部科学省「障害者の生涯学習推進アドバイザー」)

(4) 一緒に学ぼう・繋がろう 午後 13:00～14:10 ※オンライン Zoom 配信

進行 片山 由美(訪問カレッジ Enjoy かながわ学習支援員)

①オンライン参加学生の紹介:各地で学ぶ学生がオンラインで自己紹介(13:00～13:10)

②オンライン講座 A 「浮世絵から見る江戸の人たち」 (13:10～13:30)

桑山 童奈: 神奈川県立歴史博物館 企画情報部企画普及課 課長 学芸員

③オンライン講座 B 「音楽でつながろう」

(13:35～13:55)

Psalm(サーム) : 2005 年結成ピアノコーラスグループ(みんなの大学校音楽講座講師)

(5)シンポジウム 午後 14:20～16:20 ※オンライン Zoom 配信

進行 奥野 康子(訪問カレッジ Enjoy かながわ学習支援員)

テーマ 「誰もがアクセスできる生涯学習の取組 ～多様な立場から～」

シンポジスト

①「社会貢献活動『ゆめ水族園』とこれからの取り組み」

(14:20～14:50)

岩間裕一朗(セイコーエプソン株式会社 ゆめ水族園事務局)

②「社会における学びとは ～ミュージアムへのアクセシビリティを通して考える～」(14:50～15:20)

鈴木知香子(独立行政法人国立美術館 国立アトリサーチセンター ラーニンググループ研究員)

③「誰もが学ぶための、仕組みづくりと工夫」

(15:20～15:50)

引地達也(フェリス女学院大学准教授・みんなの大学校学長・文部科学省「障害者の生涯学習推進アドバイザー」)

④質疑応答・講評

(15:50～16:20)

講評 飯野順子(重度障害者・生涯学習ネットワーク会長)

II 実施結果

1. 参加者状況 総勢 106 人の参加

・内訳

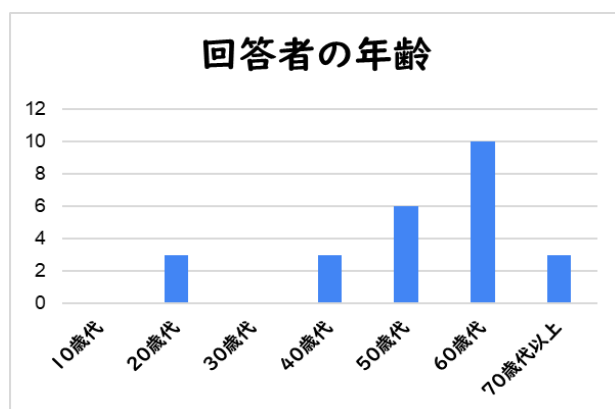
会場参加 51 名(学生・家族 4 人、学習支援員 6 人、福祉関係 3 人、当日者・家族 9 人、支援団体 3 人、行政 2 名、教育 2 名、医療 3 名、スタッフ 10 人、講師 9 人)

オンライン 55 名(学生・家族 9 人、学習支援員 6 人、当日者・家族 11 人、福祉 4 人、大学生 1 人、行政 4 名、教育 9 名、医療 11 名)

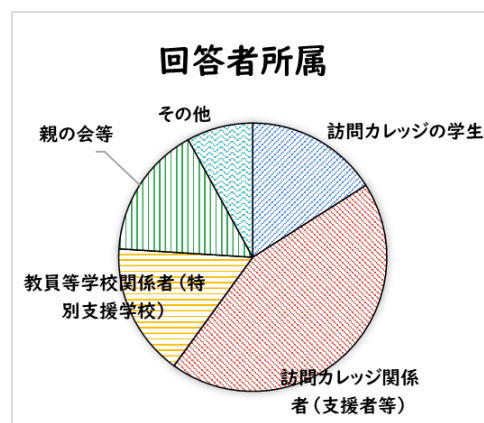
2. アンケート結果(n=25)

問 1 回答者についてお答えください。

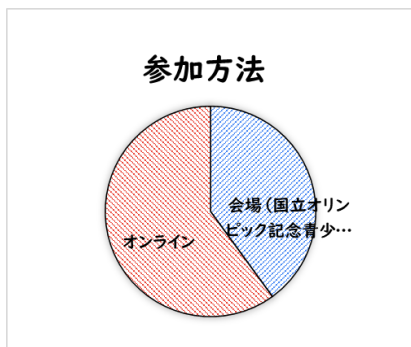
(1) 年齢



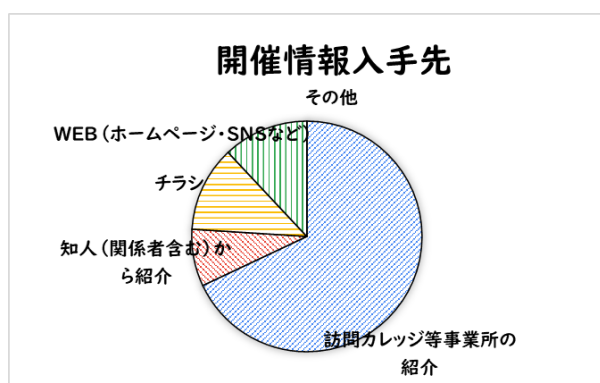
(2) 所属



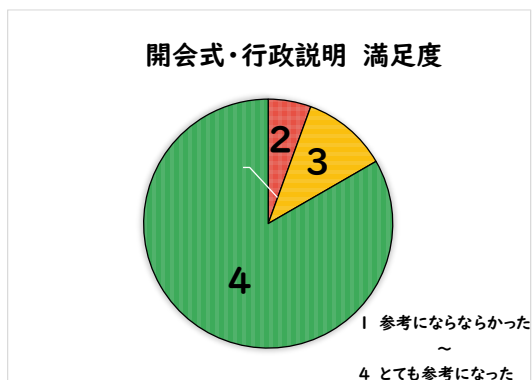
(3) 参加方法



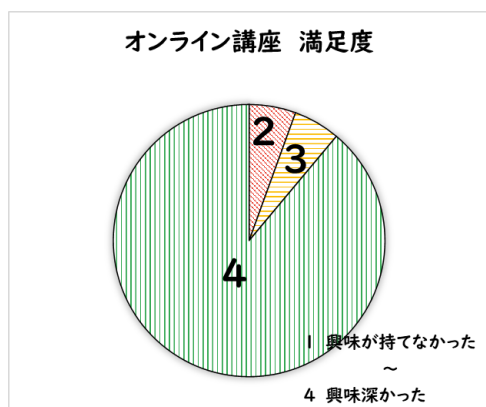
問2 本イベントの開催をどのようにお知りになりましたか。あてはまるもの全てを選んでください。



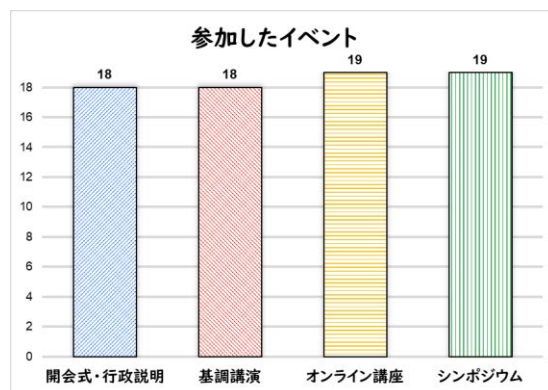
問4 開会式・行政説明への満足度



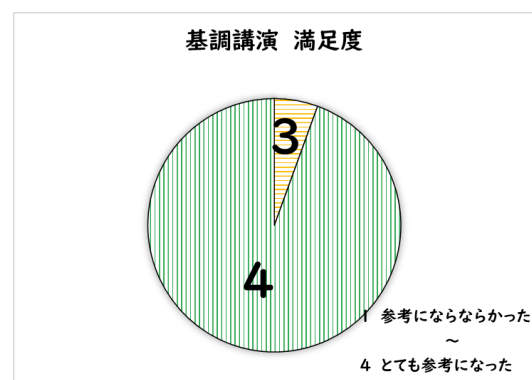
問6 オンライン講座の満足度



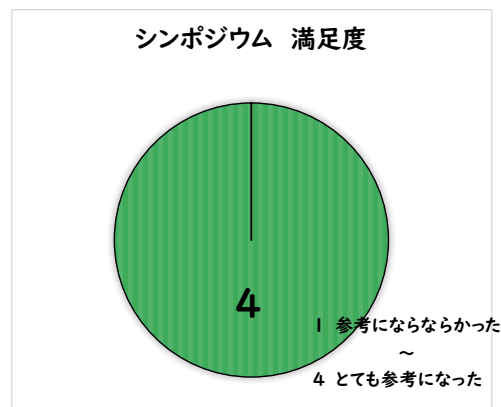
問3 本イベントで、参加・見学・体験(直接・間接を問わず)したものを全て選んでください。



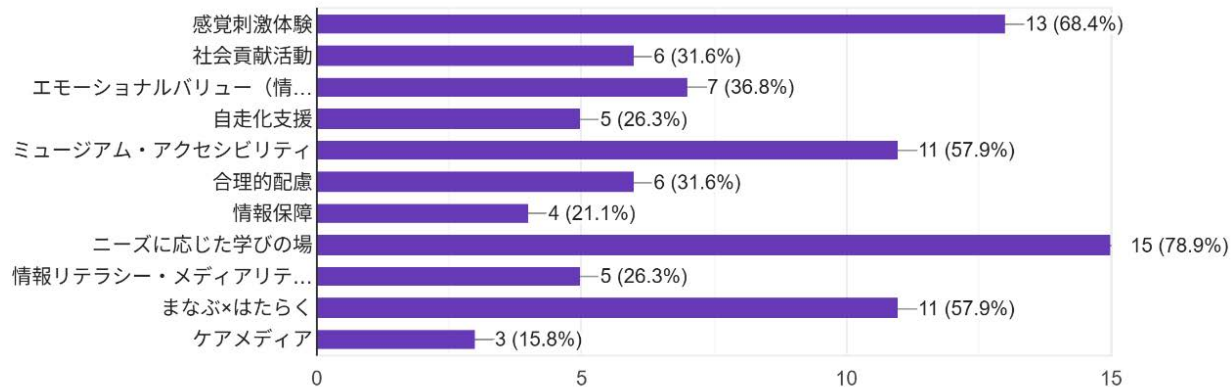
問5 基調講演の満足度



問7 シンポジウムの満足度



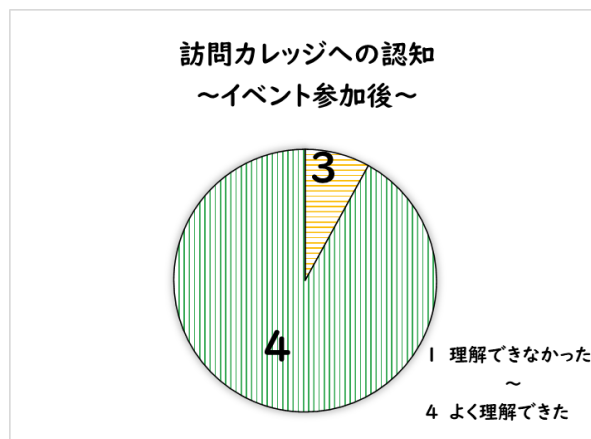
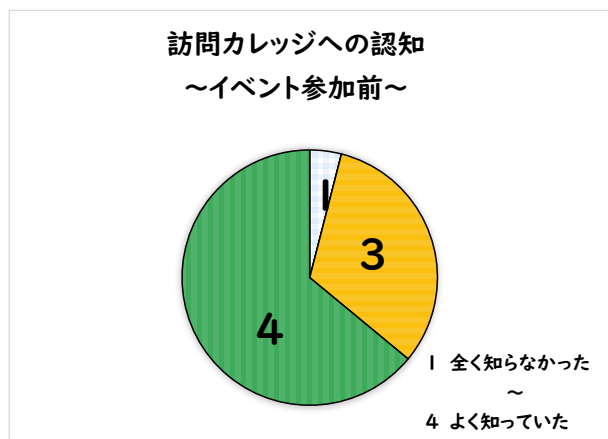
問7 シンポジウムで心に残った言葉



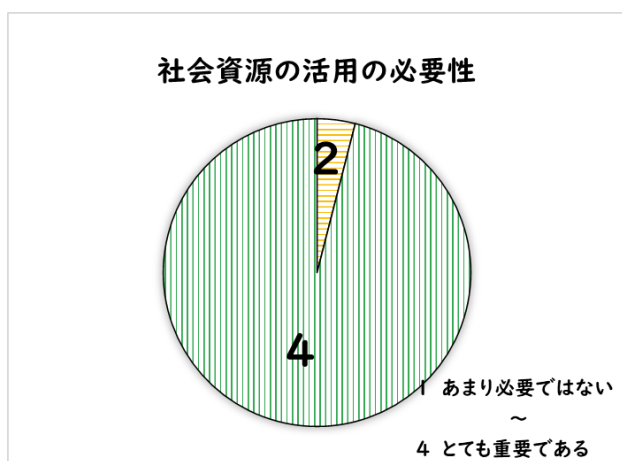
問8 訪問カレッジに対する理解

イベントに参加する前

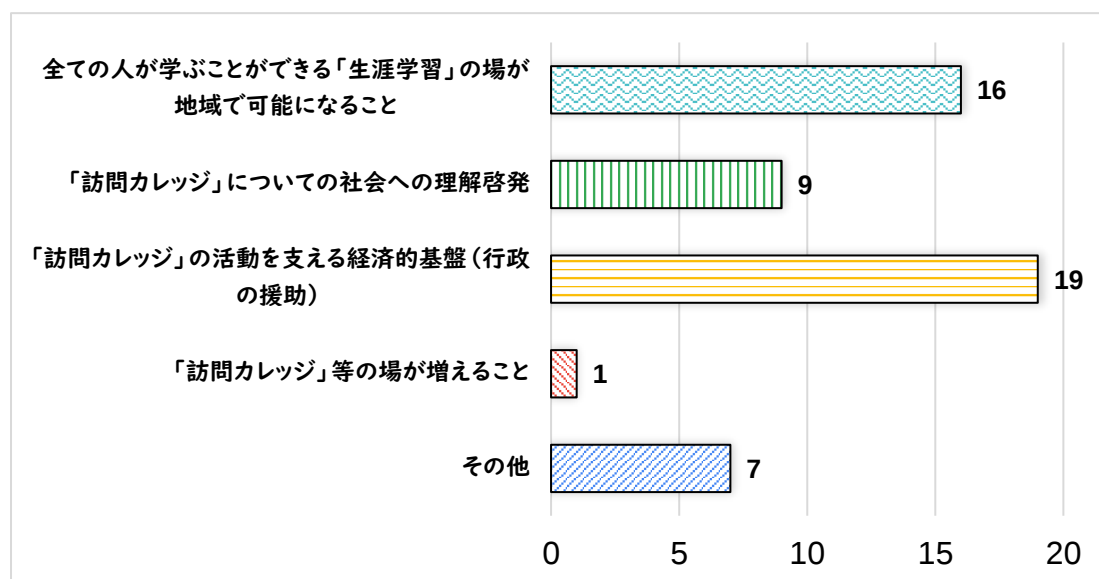
イベントに参加した後



問9 社会教育資源の活用は必要性



問10 「生涯学習」が、さらに充実するために必要なこと



【その他の内容】

東京都立特別支援学校の本人講座を行なっている学校と行っていない学校がある。肢体特別支援学校は居住している自治体にない場合がないので、設置されている自治体の隣接区に住んでいると、卒業後、同窓会がないため、母校に帰る機会は0に等しい。生涯学習のひとつの機会として、特に肢体不自由部門を設置している学校は、本人講座を行うことを東京都として働きかけてほしい。教員働き方改革と逆行するのかもしれないが、大事な視点だと思うし、卒業後数年の青年期を持て余している元気な医療的ケア児の支援をお願いしたいです。

【自由記述項目の回答】

問4-2 開会式・行政説明の感想

- ・障害者の生涯学習の推進には、福祉と教育が手を携えていくことの大切さが良く分かりました。
- ・文科省の方のお話で現状の取り組みを理解することができました。一層関心が深まりました。
- ・全国の「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」をのぞいてみようかと思いました
- ・歴史的な背景や現状について、分かりやすかった。国の本気度が伝わってきた
- ・厚労省の生活介護利用モデルは、介護事業所で自己完結することなく、他機関との連携を重視し展開されることを期待します。学校の延長ではなく、自己決定、自己実現 ウェルビーイングの視点を大切にしてほしい。
- ・開会式でのオープニングビデオで様々な様子が見られて面白かったです。
- ・行政の皆さんの生涯学習の実現に向けた施策の実現に向けた思いに触れることができました。

問5-2 基調講演の感想

- ・障害が軽度の人への支援を行う人と重度障害者の支援を行う人の相互に学び合うことが有益であることが理解できました。

- ・青年学級時代から続く理念の歴史をひもときつつ豊かな実践が生み出せる希望を感じました
- ・社会教育からのお話しに、広がりや希望も感じました。
- ・すべての社会の構成員が“共に生きる.共に学ぶ”ということを主体的に学ぶという言葉が心に残りました
- ・「障害者をソフトに排除している健常者中心の社会」という言葉が重くひびきました。
- ・外出が難しい在宅の重度障害の方にとっては在宅訪問の看護師さんやヘルパーさんと共に学習支援員は社会への接点になっていると改めて感じました。"
- ・理想を語る顔が生き生きとされていた
- ・基調講演のユネスコの学習権宣言や学習の4本柱など常に意識し活動したい。重度の障害のある方の生涯学習に携わり、学習に囚われの意味を実感し、囚われから自由になることで、学びが一層楽しいものになる。
- ・公民館の果たす役割がとても分かりやすく示されました。それぞれの地域の拠点として、連携したい社会教育施設です。行くことができないカレッジ生の存在を伝え、一緒にできることを探っていこうと思いました。
- ・生涯学習についての歴史や国際的な価値について学ぶことができました。生涯学習の権利を保障し、その実現への想いを新たにしました。

問6-2 学生の紹介・オンライン講座の感想

- ・カレッジ生が登場すると、学びの实り文化祭らしいと感じました。必要なコーナーだと思います。
- ・私は昔から美術と音楽が大好きなので、今回のオンライン講座で浮世絵についてのクイズに参加したり、みんなで一緒に歌を歌ったりしてすごく楽しかったです。
- ・こういった講座を聴くたびに学びの世界や機会が重心障害児にもあるのだという可能性をおおいに感じます。楽しい時間をありがとうございました。
- ・実際のオンライン講座(授業)の雰囲気を経験することができて良かった。
- ・浮世絵の見方が深まる、得がたい学びとなりました。「笑顔予報」素敵な曲でした。
- ・クイズに参加できて楽しかった!浮世絵は障害の重い方々にとって見やすいのではとあらたに感じましたし(立体画よりも)、音楽のオンラインもライブ感が味わえていいですね。
- ・音楽は、みなで楽しく参加できるのでとても、あたたかな雰囲気でよかった。浮世絵や歴史のこと、興味のある後利用者さんがいるのでは、ないかと感じた。
- ・いろいろな文化を学習するという視点も必要なのだと感じました
- ・浮世絵から見た江戸の人たちは、とても面白かった。サームさんの音楽も素敵でもう少し聴きたかったです。オンライでしたが Zoom のリアクション機能を使い、一体感が生まれていました。

3. 参加者レポート

第4回 訪問カレッジ「学びの実り 文化祭」に参加して

～医療的ケアの必要な重度障害者の学びの成果を発表する実践報告会Ⅱ～

おおきな事務局 竹内理恵

多くの皆さまの支えて、重い障害があっても学びを積み重ねてきた方々の喜びが染み入りました。この8年余りの間に重度障害者・生涯学習ネットワークは20団体になり、一步一步のあゆみが成果を上げていることは嬉しいことです。

(1) 行政説明

①障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について

文部科学省の別田様からは、「共に学び、生きる共生社会コンファレンスを全国各地16ヶ所で開催し、障害理解の促進、学びの場の担い手の育成、教育や福祉、労働などの分野を超えた関係者による連携体制の構築を推進し、障害者の学びの場の充実を目指します。みなさんからの発信が何より大事です。一緒に取り組みを進めていきましょう」と背中も押していただきました。

②障害福祉施策の動向について

厚生労働局の富澤様は、施策として新たに「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」が盛り込まれ、「重度心身障害や医療的ケアが必要な者などが特別支援学校卒業後に主に利用する生活介護において、生涯学習の機会を生活介護サービスで提供することで、重度の障害のある方の生活能力の向上と共生社会の実現を図ることを目的とする」と話されました。一步一步ですが、障害の重い方々に向けた生涯学習の機会の提供が図られていることは喜ばしいことだと思いました。

(2) 基調講演 演題 「障害のある方の生涯学習のこれから～ひろめる・深めるために～」

井口様(国立市の公民館館長補佐兼文部科学省「障害者の生涯学習推進アドバイザー」)は、公民館活動としての「しょうがいしゃ青年教室」と「喫茶わいがや」で行っている「コーヒーハウス」の事例とともに、「誰もが経済的負担なく(公費で)学ぶことができる環境(=学習権)を保証する。社会参加に制約のある孤立リスクを抱えた人を含め、多様な人が地域で相互に関わりをもつような学習を紡ぎ出していくことを組織・支援する。要は“誰一人置き去りにしない”ことを目指したい」と、熱く「夢」を語ってくださいました。

国立市公民館の若者のたまり場「コーヒーハウス」(公民館の青年教育事業「しょうがいしゃ青年教室」の一つ)に、障害や生きづらさなど様々な背景のある若者も参加していくようになりました。「同じ青年なのに障害者には働く場がない」という声から「喫茶店であれば障害者もサービスする側に回れるし、働く姿を町の人にも見てもらえる」と公民館の場所を借りて、高校生、大学生、社会人、主婦等の市民グループ「障害をこえてともに自立する会」(会員数約70名)が運営する「喫茶わいがや」が設立しました。運営には公民館職員も関わって障害のあるメンバーと一緒に企画を作り上げています。そしてここは、た

まり場「コーヒーハウス」のメンバーにとって喫茶店での体験実習の場という学びの機会も得ています。

「障害の有無にかかわらず、ともに活動することを通じて、多様な人の存在や価値観に気づいたり、支援したりされたりと関係性が入れ替わったりして、ともに学ぶことに価値を見出していく」また、「障害のあるメンバーは、自宅と通所先中心の生活から、学びの機会、第三の居場所、ともに活動する仲間を得ていく」と語り、それが地域での生活が豊かになることへつながっていく、つまり「共生への学び」となると結ばれました。障害者の生涯学習を支えていくためには、多様な実践があってはじめて「だれもが学ぶことができる生涯学習社会」が実現するのであり、小さな実践が多様にある地域作りが公共的な課題でもあるとも述べられていました。

(3) 一緒に学ぼう・繋がろう

各地で学ぶカレッジ生の方が、オンラインでご自身の活動やその作品などを紹介してくれました。きーぼ岡山のカレッジ生は、「手や足の指で何個ものスイッチを器用に操作してゲームを楽しんだり、ゲストと対戦もして数々勝ってきましたよ」と、いい表情を見せてくれました。オープンカレッジ@愛媛大学からは、粘土でミャクミャクを作ったり、愛媛大学で実施したオープンカレッジでのガムランのワークショップで、ゴングなどの楽器に触れて、五感で感じて楽しんで、学んでいる様子が紹介されました。そして訪問カレッジ希林館のカレッジ生は、「十二支の動物の絵を完成させました」と文字画面と同時にご自身の力強い声を聞かせてくれました。会場からもオンライン画面からも皆さんの盛大な拍手がありました。

(4) オンライン講座

①「浮世絵から見る江戸の人たち」

オンライン参加のみなさんも一緒に、桑山様（神奈川県立歴史博物館学芸員）の講座を受けました。浮世絵を追いながら、だんごや寿司、天ぷら、二八そば、しるこ…の看板などを見つけたり、「楽器も描かれていますよ」と見た絵には、太鼓があったり、タコのコスプレの人もいて、江戸時代にも今と変わらない日常があることを発見して驚いたりしました。

②「音楽でつながろう」

みんなの大学校の音楽講座講師は、Psalm（サーム）様。文化祭が行われた10月生まれの方をハッピーバースデーソングでお祝いしたり、ピアノの演奏で、♪小さい秋みつけた♪秋桜（コスモス）♪もみじなどを聴きながらしっとりした秋を味わいました。演奏を聴くだけでなく、みんなで♪笑顔予報の歌に合わせて、歌ったり手を使ってリズムに乗ったりと授業をたのしみました。

(5) シンポジウム テーマ「誰もがアクセスできる生涯学習の取組 ～多様な立場から～」

①「社会貢献活動『ゆめ水族園』とこれからの取り組み」

岩間様（セイコーエプソン株式会社 ゆめ水族館事務局）から『ゆめ水族園』での取り組みを紹介して

いただきました。ゆめ水族園とは、映像、音楽、揺れるスクリーンを組み合わせ、やわらかな空間を作り、視覚、聴覚、触覚などを通じて豊かな感覚刺激体験をお届けするエプソンオリジナルの社会貢献活動です。この活動は、社員参加型活動として、社内で募集し自主的に参加した方たちが特別チームとして、全国のエプソンから集結します(人気があり、倍率が高いそう!)

多様な体験の機会を得にくい重症心身障がい児者、難病の方などに向けて、特別支援学校や病院、福祉施設など普段から慣れ親しんでいる施設の中に「ゆめ水族園」をお届けしており、ベースとなるプログラム内容に加え、施設ご担当者と一緒に施設の特徴にあった最善のプログラムを作り上げることも特徴の一つです。貸し出しもしているとのことで、体験された方々から「気持ちの表出が少ないお子さんも動く生き物をよく目で追っていた」「水族館にきたような臨場感があった」「一生懸命手を伸ばして魚を捕まえようとしたり、みんなで大興奮」など嬉しい声が寄せられているだけでなく、自主的に参加希望されている社員さんたちからも「感動する体験者のみなさんを目の当たりにし、感動される喜びを感じ、何のために仕事をしているかわかった気がした。会社に誇りを感じる」という感想が寄せられているそうです。

もっともっとゆめ水族園を広げたいという取り組みも「自走化支援」と名付けて行われています。動画配信サービス(有料)の試行の開始、スマホやPCからの投映も可能にし、視聴可能なコンテンツも増えています。ゆめ水族館のホームページからご近所のお散歩動画を見る気分で、ぜひのぞいてみて欲しいと思います。

私も、会場の片隅での体験でしたが、音楽と素晴らしい映像に惹きつけられて、一気にダイナミックな異次元の世界に誘われました。これは広い会場でなくても、天井でも床でもカーテンでも身近な空間で、それこそ映像がゆがんでもよくて、どこでも別世界に連れて行ってくれる素敵な体験ができます。こうした活動がますます広まって欲しいと願いました。そして、日頃重度の障害者に関わったことのない方々が取り組まれていること、その社員の方たちの感想にも感動しました。

②「社会における学びとはーミュージアムへのアクセシビリティを通して考えるー」

鈴木様(国立美術館のアートリサーチセンター研究員)からは、生涯学習として大切にしているのは、「だれもが自分らしく居られて安心できること」「自分のこと他者のこと、世界の多様性を知り、対話のある社会をつくること」「社会の中で学び続けることができること」。これらをミュージアムで叶えられると思っています、とお話がありました。アート作品や美術館・博物館・科学館・動物園や水族館などの「ミュージアム」で感じる「!」や「?」には、人の営みがあり、時間も空間も飛び越えて多様で多角的な視点が集まります。探求心やコミュニケーション、思考力を引き出す力も生まれ「正解」を求めることもありません(人々の反応が多様なことはとても良いことです)。そして他者を想像する場、集め伝える場であり、「最古の時代から人々が大切に遺してきたアートには、自分らしく生きるヒントがある」と、力強いメッセージをいただきました。そして、「全ての子供たちにミュージアムデビューを!」を目標にし、上野公園内にある9つの文化施設を連携するラーニングデザインプロジェクト「MuseumStart あいうえの」から「うえの!ふしぎ発見」の取り組みをご紹介します。《「国立科学博物館」で、土や岩石などの「色」を観察する →「東京芸術大学」に移動して石や土の粉で絵の具を作る →「東京都美術館」でゴッホの絵で「色」を

見る》というコースには障害のあるお子さんも参加され、ミュージアムだからこそできる思い思いの体験をされています。

「ものをよく見て(観察する楽しさ)、だれかと一緒に感じたことを話す(対話する楽しさ)。そして、何度でもアクセスできる状態をつくる」ことがミュージアムを楽しむコツです。私も気になったミュージアムに立ち寄ってみよう!そして感動も分かち合いたい、と思いました。

なお、国立アトリサーチセンター (National Center for Research NCAR)では、「アートをつなげる・ひろめる・ふかめる」活動として以下のような教材や講座などがあります。ぜひご利用ください。

- 国立美術館「アートカード・セット」(対話が弾むコレクションのカードを使って、作品を見る力・感じる力・伝える力を育む鑑賞教材。)
- 「Social Story はじめて美術館に行きます」(発達障害がある方と周囲の関係者、利用に不安を感じる方などに美術館を楽しく過ごせるよう説明した美術館案内冊子)
- 「ミュージアムの事例から知る!学ぶ! 合理的配慮のハンドブック」(ミュージアムで実際に起こった事例をもとに検証と議論を重ねてきた内容がまとめられている)
- 「ミュージアム・アクセシビリティ講座 ふかふか TV」(誰でもミュージアムにアクセスできる機会を充実させるために、「合理的配慮」と「情報保障」を中心に学ぶ講座)

③「誰もが学ぶための、仕組みづくりと工夫」

フェリス女学院大学准教授であり、「みんなの大学校」の学長である引地先生は、文科省の委託研究として「重度障害者の学習支援の展開と地域と指定管理業者による障害者の生涯学習の場づくりの研究事業」(サントリーパブリシティサービス(株)等と連携して、重度障がい者がWEBにより参加するプログラムの構築や、障がい者が企画するプログラムの実践などを行う)や厚労省のモデル開発事業として「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」(北海道白老にある生活介護事業所において、生涯学習の機会をサービス提供の中で提供することで、重度の障害のある方の向上と共生社会の実現を図る)も請け負っていらっしゃいます。

みんなの大学校とは、WEB型(オンラインで参加・聴講、聴講生の参加、オープンキャンパスの実施)、訪問型(医療ケアの必要な人へ・訪問講義+B型就労他)、連携型(遠隔地の福祉事業所などをつないでの定期講義・交流)で、教育系・医療系・福祉系・企業団体系など、どんな人とも繋がれるところです。引きこもり・ニート・不登校の人ともつながっています。

運営の考え方として、障がい者の「生涯学習」「学び」を考えるにあたり、新しいメディア社会での学びを検討して行く必要があります。情報リテラシー(知識や能力を活用する力)教育の未整備が課題となる中、繋がることで力をつけていけるようにしたいと考えています。その際に大事にしているのは、以下の4つです。

- ・同時間性の確保(オンデマンドではなく、「いま、つながっている」ことを重要視する)
- ・双方向性の確保(名前を呼びあったり、意見を言ったり聞いたりして、発言したことが「流されない」安心感がある)

・それぞれの「理解」がかけがえのない学び（「理解」というと 1～100 までの幅があるが、その人が参加しただけでも 100。評価ではなく受容と展開が大事）

・次のステップを共有（何をやっていくか、近い将来の約束を発信する。「1 学期に 15 回の講義で単位を取得する」という、この連続性が将来につながっている）

リモートの学びに向けては、環境の整備も大事です。本人の意欲を確認し、パソコンなどの整備をどこがするのか（自治体の理解がないところもある）、また、周囲の理解とやる気がないと「これはヘルパーの仕事ではないのでできない」と言われてしまう、適切なコンテンツが提供できるか、そして相互コミュニケーションの重要性への理解があるかも重要なことです。メディアについてですが、これは「自分の拡張機能」、つまりメガネのようなもので、自分ができないことをできるようにする道具と捉えています。「自分を生かしてくれる」環境であり、自分が社会に受け入れてもらう道具です。みんなの大学校では、プログラムは 1 学期に 15 回で 1 回 50 分、講師としてプロのミュージシャンが参加していたり、元大学教授の方などが当たっています。大学に準じたものにして成績証明書や修了証を発行することで達成感を持ってもらっています。

この取り組みをなんとか福祉サービスにつなげたいと思い、就労継続支援 B 型事業所を立ち上げ、週 4 日を仕事（在宅が多い）、週 1 日を学びとしています。フェリスとコラボして、学長の授業を受けたカレッジ生（当日は会場参加してくれました）からは「浮世絵の勉強をしています。音楽の授業も好き」「フェリス女学院に行って引地先生の授業を受け、ランチも食べました。また行きたいです」と報告があり、会場の皆さんから大きな拍手がありました。

「最後に学びの『姿勢』についてです。これが一番伝えなかったことです」と強調されたのは、学びの「囚われ」からの解放ということでした。「評価に基準は存在しない」「前後・他者と比較しない」「教える、学ばせるを前提とせず、教えあう、学びあうを前提とする」「知識を与えることではなく、機会を与えることに重きを置く」つまり「確実性ではなく可能性を追求する」ということ。

学びとは、人として生きるためになくてはならないものです。人は学びによって愛を深め、さらなる幸せを手にしていくのかもしれませんが。その機会を奪ってはいけなし、その機会をともにできたら嬉しいことです。



開会挨拶



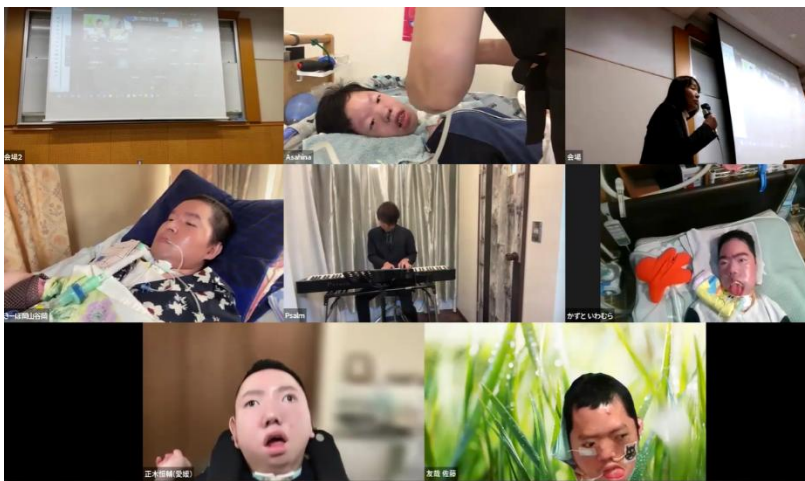
文部科学省



厚生労働省



基調講演



学生の紹介



オンライン講座 A



オンライン講座 B



VI 研究のまとめ

本研究のまとめとして、「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」を持続可能な形で実施する方法とその意義を述べる。昨年度の連携協議会で発表いただいた障害福祉課の方から、補助事業としての社会教育より、人員を配置できる障害福祉の中での取り組みが現実的だとアドバイスをいただいた。本年度、厚生労働省「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」（以下、厚労省モデル事業）が立ち上がり、生活介護事業所の支援の中で職員の体制加算による制度化が現実的であると考えた。

「訪問カレッジの始め方」としては、法定外事業と法内事業（障害福祉サービス）の2種類に分けられる。民間が行う法定外事業は重度障害者・生涯学習ネットワークの多くの団体が該当し、自治体委託や協働事業は2団体がある。法内事業として重度訪問介護や就労継続支援B型の活用は3団体である。加えて、今後は厚労省モデル事業により生活介護事業所からの訪問も期待される。

重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援				
訪問カレッジの始め方				
はじめにすること				
ニーズの把握	①学校卒業後在宅生活を余儀なくされている卒業生がいるか？ （高等部訪問教育卒業生、病気・障害の進行により通所困難になった卒業生など） ②本人・ご家族は学びを希望しているか？			
支援仲間（学習支援員）	一緒に学校卒業後の生涯学習支援を実現する仲間を作る。 （従来の卒業生への個人のボランティア的関わりから組織的な対応へ）			
実施方法の検討	「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」の実現方法を検討。			
「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」の実現方法				
	法定外事業		法内事業（障害福祉サービス）	
経営資源 Resource	民間法定外事業 （任意団体・NPO等）	自治体委託事業 （NPO等法人）	重度訪問介護 就労継続支援B型	生活介護事業
①ヒト：資格・経験条件	無し（元教員等）	無し（元教員等）	重訪研修等修了	職種による
②モノ	学習教材	学習教材	学習教材	学習教材
③カネ	無償or有償 助成金、会費・賛助会費、受講料	自治体委託費	障害福祉サービス等報酬	障害福祉サービス等報酬
④組織	①事業要綱 ②雇用契約 ③保険 ④拠点		実施法人の理解（事業・雇用）	
⑤情報	重度障害者・生涯学習ネットワークを通じた情報共有 スタートアップ資金：「訪問カレッジ」夢プロジェクト基金（1件30万円）の活用			

今年度、厚労省モデル事業に採択を受けた生活介護事業所の研究に関わる中で、この事業について期待することを4点あげる。

1. 卒業時の移行支援について

学校卒業前に通常、学校、福祉事業所及び保護者を交えた移行支援会議が実施されている。会議の内容は、主として食事、排泄、呼吸、姿勢等のいわゆるマズローの欲求階層図における「生理的欲求」に関する事項が中心となる傾向がある。

一方、生活介護事業において、日中活動は利用者の自己実現の場として重要な意味を持つ。しかし、移行支援会議では、そうした観点に基づく情報の伝達が十分でない場合が見受けられる。



本来、学校の授業を通して、活動時の表情や様子等から本人の興味・関心や得意分野等について蓄積された情報は、生活介護事業所の個別支援計画に適切に反映されることが望ましい。学齢期及び移行期における学校と福祉施設との間の情報共有の在り方は、重要な検討課題である。

2. 学びのプログラムについて

学校教育は、教育課程に基づき、教員が学習内容を決定し、授業を実施する。これに対し、卒業後の学びにおいては、学校で培った学びを元に、「もっと〇〇をやりたい」という内発的動機付けによって、本人が学ぶ内容を自ら選択できることが大切である。そのため、複数のプログラムを用意するなど、支援者には、自己選択・自己決定を重視した取組が求められる。日常生活における自己選択・自己決定の積み重ねは、意思決定支援の基礎である。

学習における喜びは、「できた」「わかった」という達成感に起因するものであり、その達成感を得るための方策として「発達の最近接領域」に基づく課題設定が有効である。この考え方は、福祉分野における「できない部分を支援する」という視点とは異なり、本人が努力すれば達成可能な課題を設定するものである。このような教育的視点については、特別支援教育経験者等を日中活動のゲスト講師として招くなど、福祉従事者が学ぶ機会を設けることも有効な方法と考える。

生涯学習とは

	「勉強」の中国語の意味 「無理強いする、強制する」 勉強＝学校教育（ネガティブなイメージ）
	「学習」の意味 「書物や講義、実践などを通じて知識や技能、経験などを得ること」 学習＝学び（主体的な活動）
	「生涯学習」は、人が生き続ける中で見つける成長・発達の連続 生きることは学ぶこと 学ぶことは生きる喜び

教育における支援とは

1. **ヴィゴツキー (Vygotsky, L. S.) とは!?**
旧ソビエト連邦の心理学者

2. **「発達の最近接領域」とは!?**
「できるかできないか」というレベルの課題を与えることは、子どもの好奇心を刺激し、興味や関心を引くためにも有効である。



 課題が高すぎると無力感へ

3. 地域との連携について

地域との連携は、生活介護事業における社会参加促進の観点から極めて重要である。

例えば、「町に花を広げよう」というテーマで利用者が栽培した花を町内や公園等に設置する活動、保育所や地域福祉施設との交流、地域住民をゲスト講師として招いた講座の開催、図書館司書による本の読み聞かせの実施、公民館施設の活用等があげられる。これらの活動は、地域との関係性を深める有効な取組であり、共生社会の一步である。

4. 訪問型支援の推進について

重度障害者の場合、障害の進行等により通所利用が困難になる場合がある。従来の制度では、利用者が通所できない場合、事業所に報酬が支払われない仕組みとなっていたが、今後は、職員が利用者の居宅を訪問して支援を行う形態に対しても報酬が認められるよう、制度的な整備を求めたい。新型コロナウイルス感染症流行時には、特例的に訪問型支援が認められていた経緯があり、このようなアウトリーチ型の支援は、重度障害者に対する継続的支援の観点からも不可欠である。訪問型支援は、居宅訪問型児童発達支援の成人版として位置づけることで、より具体的な運用イメージを持つことができると考えられる。

訪問型の保育・療育・教育			
就学前	福祉	居宅訪問型保育	平成27年度～ 原則、1日8時間 横浜市基本分単 価495,250円
	福祉	居宅訪問型 児童発達支援	平成30年度～ 基本給付 10660円
学齢期	福祉	居宅訪問型 児童発達支援	平成30年度～ 基本給付 10660円
	教育	訪問教育	昭和54年度～ 訪問型児童発達支援 3か月以上の利用 継続で連続5日以内 1月2回程度 通所と併用への配慮
学校卒業後	福祉	生活介護事業所からの 居宅訪問	自治体・法人 生活介護は無し 参考）重度訪問 2H報酬4244円
	教育	訪問型生涯学習	民間（法定外）
	教育	青年学級（訪問）	自治体事業

なお、厚生労働省「特別支援学校卒業後における生活介護利用モデルの作成事業」は令和8年度予算に盛り込まれなかったが、生活介護事業所や親の会等関係者団体と協力して引き続き、制度化を探っていききたい。

おわりに

第4回の「学びの実り文化祭」は寒い日でした。暖房もつかない本当に寒い会場でしたが、内容は温かいものでした。寒い中、カレッジ生と家族の参加もあり、感激しました。

また、このシンポジウムの縁もあり、神奈川では社会教育施設との連携も進みました。一つの出会いが色々な展開を生みます。2月には博物館職員と学習支援員が対面で、「アクセシビリティ研修講座」を一緒に受講しました。出前講座担当の学芸員は「私は一度だけお会いしたカレッジ生の眼が忘れられず、オンライン講座のパワーポイントを作成している時など、あの眼に動かされているような気持ちになることがあります。」と感想を吐露しています。心から共感するとともに、人を動かし繋ぐカレッジ生の魅力に感動します。一人の想いに寄り添う生涯学習が、みんなのウェルビーイングになっています。

今年度は毎年の「学びの実り文化祭」に加え、ネットワーク団体の地元開催にも取り組みました。東京・千葉・岡山・神奈川の4地区で人材育成も兼ねた実践報告会が開催され、各地域で私たちの活動が着実に実っています。

ネットワークは、初期の5団体から今年度は20団体になりました。新しい団体も、早くから活動している団体もあります。各地に生まれていますが、土の中に埋もれて見えない種のような存在です。地域を耕し、各地で活動を始めていますが、ようやく芽を出した若葉は、花の名前もわかりません。花の形や色（学びの形態）は多種多様で、なんでもありです。これらの多種多様な花（学び）を全国単位で繋ぎ、地下で根を支えるのが、私たち「重度障害者・生涯学習ネットワーク」です。互いの活動を認め合い、励まし合い、各地の若葉が成長し、全国各地に障害のある方の様々な学びの花が咲き誇ることを願っています。

若葉は、痩せた土地から「学びたい」という意欲だけを糧に、飛び出しています。向かうべき方向（望み・希望）は明確ですが、痩せた土地を肥沃な土地に変える肥料（地域連携）と、水（お金）がありません。行政も含めた地域社会全体で知恵を出し合い、肥料と水を得る方法（制度化）を編み出すことが早急に求められています。

私たちは、今年度作成した報告書や「生涯学習学び事例集」や「他分野連携による生涯学習プログラム」のリーフレットが、地域連携づくりに活かされると期待しています。リーフレットが活用され、どんな新しい出会い・面白い事業を生み出されるかを楽しみにしています。ぜひ、ご覧いただき、ご感想やご意見などをお寄せいただけると幸いです。

これからも皆さまのお力添えをいただきながら、皆で「誰もが学び続けられる社会」を、自由に伸び伸びと、色々な形に育てていけたらと思います。

重度障害者・生涯学習ネットワーク

副会長 成田 裕子

（NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢協理事長 訪問カレッジEnjoyかながわ学長）

重度障害者・生涯学習ネットワーク(令和8年2月現在)

	事業名	事業 開始年月	事業者名	法人等の 代表者名	事務局所在地
1	日野市障害者訪問学級	1981年4月	日野市障害者問題を考える会	名取潮子	東京都・日野市
2	訪問療育 いるか	2011年12月	NPO 法人かすみ草	早野節子	東京都・杉並区
3	訪問カレッジ@希林館	2012年9月	NPO法人地域ケアさぽーと研究所	飯野順子	東京都・小平市
4	ひまわり Home College	2013年4月	NPO 法人ひまわり Project Team	藤原千里	東京都・新宿区
5	訪問大学おおきなき	2014年4月	NPO 法人訪問大学おおきなき	相澤純一	東京都・大田区
6	訪問事業 i.porte(あいぽると)	2017年4月	NPO 法人あいけあ	岡安 玲	神奈川県・川崎市
7	訪問カレッジ静岡	2018年4月	静岡県障害者就労研究会	瀬戸脇正勝	静岡県・静岡市
8	在宅訪問学習支援事業「SHJ 学びサポート」	2018年4月	認定 NPO 法人スマイリングホスピタルジャパン	松本恵里	東京都・杉並区
9	みんなの大学校	2018年4月	一般社団法人みんなの大学校	引地達也	東京都・国分寺市
10	訪問カレッジ Enjoy かながわ	2019年4月	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会	成田裕子	神奈川県・横浜市
11	訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学	2019年6月	愛媛大学	苅田知則	愛媛県・松山市
12	NPO 法人こどもホスピスプロジェクト	2021年7月	NPO 法人こどもホスピスプロジェクト	佐藤良絵	東京都・昭島市
13	医療型障害児入所施設カリヨンの杜	未実施	医療型障害児入所施設カリヨンの杜	鍵本聖一	埼玉県・さいたま市
14	訪問カレッジ@きーぼ岡山	2022年6月	NPO 法人 CAP プロジェクトおかやま	真見圭子	岡山県・岡山市
15	訪問カレッジ Be Prau	2024年4月	一般社団法人ケアの方舟	西村理佐	埼玉県・さいたま市
16	障害の重い人の地域支援「ふりかけプロジェクト」	2020年12月	明石市立ゆりかご園	飯塚由美子	兵庫県・明石市
17	特定非営利活動法人合	未実施	特定非営利活動法人合	田井寿美江	埼玉県・越谷市
18	ぼれぼれ学習会	2012年6月	ぼれぼれ	田村美奈	新潟県・長岡市
19	訪問カレッジ Enjoint ちば	2025年4月	訪問カレッジ Enjoint ちば	木川純子	千葉県・千葉市
20	訪問カレッジ ぽぷり	2020年8月	NPO法人ぽぷり	川合 登	埼玉県・川越市

文部科学省委託 令和7年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業

他分野連携による新たな障害者の生涯学習のモデル・ネットワーク構築

「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に関する実践研究 報告書

重度障害者・生涯学習ネットワーク

令和8年3月1日

連絡先 重度障害者・生涯学習ネットワーク・事務局(NPO法人地域ケアさぽーと研究所内)

〒187-0043 東京都小平市学園東町1丁目22-6

電話:042-403-3229 FAX:042-405-1779

Email: ccsupport@jcom.home.ne.jp 担当 下川和洋